

## 『老子道德經』古点の和訓語彙攷略

西 崎 亨

### 一

築島裕氏が「理想の国語辞典」(『u p』一二四号 東京大学出版会・『国立国語研究所「日本大語誌」構想の記録』港の人・所収)において、「最も理想的な辞書を作ることが許されるとするならば、まず第一に、厳格精密な用例の表記が必要であるということを提唱したい。」と説かれた。山本真吾氏は『古語大鑑』の新しさ(『日本語学』vol 32 2 明治書院)において、「厳格精密な用例の表記」を「その新しさ」として、それを具体的に記述している。

ところで、その用例出典として『老子道德經』(迄安六年点)『老子道德經』(至德三年点)『老子道德經』(天正六年点)『老子道德經』(室町期点)の四点の『老子道德經』が示されている。

本稿は、迄安六年点、至德三年点の二本の依拠テキストの項に『老子道德經』古点の国語学的研究(西崎亨)所収「訓読文」とあることに鑑みた『老子道德經』の国語学的考察に就いての稿の一班である。

『老子道德經古點の国語学的研究 譯文篇』と題して、鎌倉時代以前に於ける三古点本対照譯文を作成し、油印（私家版）したのは昭和六三年であるので二十数年前になる。

鎌倉時代以前に於ける、「老子経」の訓読を知る資料としては、図書寮本類聚名義抄所収古訓、金澤文庫本群書治要卷三十四所収老子、梅澤記念館所蔵応安六年点老子（二帖）、書陵部蔵至徳三年点老子経（二帖）の四点が知られている。ここに、『老子道德經』古点というのは、梅澤記念館所蔵慶安六年『老子』二帖、書陵部蔵『老子経』至徳三年点二帖、金澤文庫本『群書治要』卷第三十四所収『老子』の三古点本を指している。

『老子道德經古點の国語学的研究 譯文篇』を私家版として油印した時、研究篇・和訓索引篇の作成を予定していたが、二十数年間なすことなく今に到った。

和訓語彙というのは、漢字に付された訓および義注の確実な語を指すが、譯文を作成するなかで、『老子経』の和訓語には、他には見られないような特殊な訓の見られたことを思い出す。

築島裕編『訓点語彙集成』（全九巻）が公刊されたが、その所収語と比較することで、「老子経」の和訓語の特殊な側面の一斑を示したいと思う。

なお、以下に示す掲出語に示す用例は、『老子道德經』には複数見られる和訓語の一例を抄出したもので、同一和訓語は他にも複数見られる場合が多い。しかし、語彙索引を旨とするものではないので、その点は了とせられたい。また、用例の箇所を示す、例えば「七二①」（七二頁一行目）は、拙著『老子道德經古点の国語学的研究 譯文編』に従っている。

## アガフ（與）

『老子道德經』虚心第二十一に、

○言は道、万物に稟<sup>ウ</sup>ケ與<sup>アカ</sup>フ（梅澤記念館蔵本『老子』（以下『梅本』巻上・虚心第廿一・七二①）と表示）とある。  
書陵部蔵『老子経』（以下『書本』と略称）には、「フ」のみ仮名で加点する。観智院本『類聚名義抄』（以下「観『名』」  
と略称）は、「與」字に「アガフ」訓は見えない。築島裕編『訓点語彙集成』（以下『集成』と略称）には「アカフ」  
に「償」「徴」「班」「質」「購」「贖」字、「アカヒノム」に「求」字が掲出されるが、「與」字は見えない。

## アギト（售・咳・唾）

○嬰兒<sup>シ</sup>の（の）「之」未<sup>だ</sup>（だ）<sup>アキト</sup>【左訓「カタフセ」】未<sup>る</sup>（る）<sup>如</sup>シ（『梅本』巻上・異俗第廿・六七③）

○嬰兒の「之」未<sup>だ</sup>（だ）<sup>アキト</sup>咳<sup>ハ</sup>未<sup>る</sup>（か）如<sup>し</sup>【「咳」字の左傍に「唾イ」と見える】（『書本』巻上・異俗第廿・六七③）

○終日に號<sup>ナケ</sup>（れ）とも而<sup>アキト</sup>て唾<sup>ハ</sup>せ不<sup>す</sup>と【「唾」の左傍には、「アキト」以外に「コエカレ」「ムセハス」と仮名点あり。】

（『書本』巻下・玄符第五十五・一八九④）

本点には、「アギト」と加点する漢字に「唾」「咳」「唾」の三字が見える。『集成』には、アギトに「鰓」「鰓」「鰓」字、「アギトフ」に「响」「咳」字が掲出されるが、「唾」「唾」字は見られない。因みに観『名』に見えるものとしては「咳」字のみである。

## アキナフ（售）

○賣（る）者は疾<sup>ト</sup>ク售<sup>アキナ</sup>フコトヲ欲す〔也〕【「售」字の右傍に「ウラム」左傍に「ヒサク」と加點】『梅本』卷下・為道第六十二・二二三③

○賣る者は疾<sup>ト</sup>ク售<sup>アキナ</sup>ハンことを欲す〔也〕【「售」字左傍に「ヒサカン」と加點】『書本』卷下・為道第六十二・二二三③

『集成』によると、無窮会図書館蔵本『大般若経音義』（三五ウ⑦）の例が示されている。観智院本『類聚名義抄』（佛中四六ウ5）（以下観『名』と略称）にも「售」字に「アキナフ」とある。

### アキラカナリ（嗽）

其レ上<sup>ニシテ</sup>嗽<sup>アキ</sup>ラカナラ不<sup>ス</sup>『梅本』卷上・賛玄第十四・47⑥

『書本』も「嗽<sup>アキ</sup>ラカナラ不<sup>ス</sup>」と加點する。因みに、左傍に「六（音）曉」と字音注記が見える。

『集成』には、興福寺藏承徳三年点『大慈恩寺三藏法師傳』法隆寺藏天治三年点『大慈恩寺三藏法師傳』の二例が示されている。観『名』には見えない。

### アグ（抗）

○故に兵を抗<sup>ア</sup>ケ相（ひ）加ム（『梅本』卷下・玄用第六十九・242③）因みに、『書本』・『群書治要』所収『老子』（以下『群本』と略称）にも同じい。

『集成』には「抗」字に「アグ・イダク・タクラブ・フセク・マウク」等の和訓が見えている。観『名』（佛下本二二オ5）にも「アク」とある。

### アサシ（渝）

○質【入】直【入】は渝<sup>アサ</sup>キ【右訓にカハル】か若（し）『梅本』卷下・同異第四十一・147①

右文の割注部には「質朴(の)〔之〕人は五色の渝<sup>カヘ</sup>り浅<sup>アサ</sup>クシテ」とある。因みに『書本』には「質直は渝<sup>カヘ</sup>ルか若し」、割注部も「渝<sup>カヘ</sup>り浅<sup>アサ</sup>クシテ」とある。『集成』には、「渝」字に「カハル」「ヤム」の訓は見えるが、「アサシ」は見られない。観『名』にも見えない。

### アザムク (驕)

○果に(し)而<sup>テ</sup>驕<sup>アサム</sup>クこと勿<sup>レ</sup>レ『梅本』卷上・倭武第三十・107②

『書本』『群本』ともに「驕<sup>アサム</sup>クこと」と加点する。なお、割注部に「驕は欺<sup>キ</sup>【平】(なり)〔也〕」(『梅本』、「驕【平】は欺<sup>キ</sup>(なり)〔也〕」(『書本』、「驕【平】は欺<sup>キ</sup>【平】」(『群本』)のような義注がある。

『集成』には、「驕」字に「アザムク」と訓む例は見えない。観『名』(僧中五六ウ3)には、「アサムク(上上濁平○)」とある。

### アシシ (凶)

○常を知(ら)不妄りに作するとき凶<sup>ア</sup>シ、(『書本』卷上・帰根第十六・56①)

○く神明を失(ふ)。故に凶<sup>ア</sup>シ、(『書本』卷上・帰根第十六・56③右例の割注)  
右文の同箇所は、『梅本』では共に「凶<sup>ア</sup>シ」と訓む。

『集成』には、至徳三年『法華経音訓』と当該例の二例が示されてある。

観『名』(僧下五五ウ1)に「凶」字に「アシ(平上)」とあるが、「アシシ」は見えない。形容詞終止形を「しシ」とするのは、『老子道德経』訓では当該例のみである。

### アタタカナリ (温)

○温<sup>アタ、カ</sup>ナル所有レハ、必(ず)、寒キ所有(り)〔也〕(『梅本』卷上・無為第廿九・103③)

『書本』は「温ムスル」<sup>アツ</sup>と加点する。

『集成』には、東京国立博物館蔵康和四年点『大毘盧遮那経疏』他九例が示されている。観『名』(法上九才3)に「アタ、カナリ」、図『名』(二四2)に「アタ、カナリ(平平上平〇〇)」と見える。

### アタフ(賃)

○夫(れ) 唯道、善ク賃<sup>アタ</sup>エ且タ成ス(『梅本』卷上・同異第四十一・148①)

○夫(れ) 唯、道、善ク賃<sup>アタ</sup>へ、且(た)成ス(『書本』卷上・同異第四十一・148①)

『集成』には、「賃」字に「アタフ」訓は見られない。観『名』にも見えない訓である。

### アタル(加)

○故に兵を抗ケ相(ひ)加<sup>アタ</sup>ル(『書本』卷下・玄用第六十九・242③)

○故(に) 兵を抗ケ相(ひ)加<sup>アタ</sup>ル【「加」字に「當也」の義注がある。】(『群本』卷下・玄用第六十九・242③)

因みに、右文の該当箇所は、『梅本』は「加ム」と加点する。

『集成』には、「カサヌ・クハハル・シカノミナラズ・シノグ・ソフ・ソネモノ・ナス・フスベマジフ・マサル・マジフ・マス・マスマス・マタ」等の訓は確認できるが「アタル」は見られない。観『名』にも見えない訓である。

### アツシ(淳) ↓ タツキ(淳)

### アツマル(湊) ↓ アツム(湊)

○衆<sup>モロモロ</sup>ノ幅<sup>ヤ</sup>共に湊<sup>アツマ</sup>ル【「湊」】(『梅本』卷上・無用第十一・卷下・法文第三十九・37⑤)

因みに、右の「アツマル」は左傍に加点されている。『書本』も「湊<sup>アツマ</sup>ル」と加点する。

『集成』には「湊」字に「アツマル」と付訓する例は多い。観『名』(法上一二才1)に「アツマル」、図『名』(五一5)

に「アツマル（平平○○）」と見える。

### アツム（湊）

○車穀の衆輻ノ為に湊メ所ル、か如（し）〔也〕〔『梅本』巻下・法文第三十九・141②〕  
『書本』『群本』ともに「湊メ所ル、」と訓む。

『集成』には、「湊」字に「アツム」訓は確認できないが、「アツマル」訓の例は多く見られる。観『名』（法上二一  
オ1）には、「湊」字に「アツマル」と見える。

### アトコブ（跨）

○跨<sup>アト</sup>コフ者は行<sup>オ</sup>（は）（ず）〔不〕〔「アトコフ」は左傍にあり合点を付す。右傍には「アフトコフ」と加点〕〔『梅本』  
巻上・善思第廿四・81④〕

因みに、『書本』にも「アトコフ」と加点する。

『集成』には、「アトコブ」の他「アットコブ・アフトコブ・アムトコブ」等々十七の和訓が示されている。

観『名』に「アトコブ」は見えないが、観『名』（法上四〇オ3）に「跨」字に「アフトコフ（上上上濁上〇）」と  
見える。因みに『図書寮本名義抄』（以下図『名』と略称）には「アフトコフ（上上上濁上平濁）」と見える。

### アナガチニ（彊）

○彊<sup>アナガチ</sup>（に）詰<sup>ナシ</sup>り問<sup>ト</sup>フテ而て〔「彊」字の左傍に「シヒ」と加点がある。〕〔『梅本』巻上・賛玄第十四・47④〕  
『書本』には、『梅本』の左訓と同じく「シヒ（右訓）」とある。

『集成』には、「彊」字に「アナガチ」は見られない。観『名』にも見えない訓である。

### アナドル（輕）

○禍乱【去】(の)「之」害【去】は敵の家を欺キ輕(り)テ『梅本卷上・成象第六・24⑤』

『書本』には、「輕」字の右傍に「カ」、左傍に「アナト」と加点する。『群本』は、「輕」字の右傍に「カロンシ」と加する。

『集成』には、「輕」字に「アナドル」訓は見られないが、「アナヅル」は確認される。観『名』(僧中四四ウ3)には、「輕」字に「アナツル(上上上濁平)」と見える。

### アバク(發)

○將に發<sup>アハ</sup>ケンことを恐<sup>オ</sup>ツ將<sup>ヘ</sup>シ『書本』卷下・法文第三十九・137④

『群本』にも「發<sup>アハ</sup>ケむことを」と見える。

『集成』には、「發」字に「アバク」の他三十語誓い和訓が見られる。観『名』(僧下五五オ8)にも「發」字に「アハク(合点アリ)」と見える。

### アフ(混) ↓ヒタタク(混)

○故に混<sup>ア</sup>フて而(て)一ト為<sup>ナ</sup>ル『書本』卷上・贊玄第十四・47④

当該箇所は、『梅本』には「ヒタ、ケ」と加点する。因みに、当該箇所の「混<sup>コ</sup>【去】は合【入】也」(『梅本』、「混【去】は合也」『書本』とある。

『集成』には、「アフ」訓に「混」字は見えない。観『名』にも見えない。

### アフトコフ(跨)

○跨<sup>アフ</sup>コフ者は行<sup>オ</sup>(は)「ず」【不】「アフトコフ」は右傍にある。左傍には「アトコフ」と加点。合点を付す【『梅本』卷上・善思第廿四・81④】



因みに、『書本』は「アトコフ」と加点する。

『集成』には、「アフトコブ」意外に、十数の和訓が示されてある。観『名』（法上四〇オ3）にも「アフトコフ（上上濁上〇）」とある。

### アマシ（味）

○無【平】味【上濁】を味ムす『梅本』巻下・思始第六十三・216②  
『書本』『群本』にも「アマンす」「アマンス」と見える。

『集成』には、「味」字に「アマシ」の他「アチハヒ・シホ・ムマシ」等の和訓が見られる。観『名』には見られない訓である。

### アミ（羅）

○走者には羅<sup>アミ</sup>を為シツ（ベ）「可」（し）『書本』巻上・序・3③  
『梅本』には「羅」字に「ア」（右傍）「力多反」（左傍）と加点する。

『集成』には、「羅」字に「アミ」の他二十数語の和訓が示されている。観『名』（僧中七オ6）に「アミ（平平）」とある。

### アヤフシ（隳）

○或（る）時（は）載<sup>ヤス</sup>ク或（る）時は隳<sup>アヤウ</sup>シ『梅本』巻上・無為第廿九・103⑤

○或（る）ときは載シ、或（る）ときは隳<sup>アヤウ</sup>シ『書本』巻上・無為第廿九・103⑤

因みに、『梅本』『書本』には「隳【平】は危<sup>クキ</sup>【平】（なり）〔也〕」「隳<sup>キ</sup>は危（なり）〔也〕」の義注が見られる。  
『集成』には、「アヤフシ」に「隳」字は見られない。観『名』にも見られない。

## アラガフ(争)

○民(を)使<sup>シ</sup>(て)争<sup>アラカ</sup>ハ不<sup>シ</sup>ラ使<sup>ム</sup>ム<sup>左傍</sup>〔『梅本』卷上・安民第三・16①〕  
『群本』も「アラカハ」と加点する。『書本』は「カハ」とのみ加点する。

『集成』には、宮内庁書陵部藏弘安元年点『春秋経傳集解』の例を含む五例が示されてある。観『名』(佛上四四才2)に「アラカフ(平平上濁○)」とある。

## アラス(不)

○以て人を割<sup>カッ</sup>截<sup>セツ</sup>セントニハ不<sup>アラ</sup>ス〔『梅本』卷下・順伦第五十八・202①〕

『書本』も「不<sup>アラ</sup>ス」と加点する。『集成』には「不」字を「アラズ」と訓する例として二十数例が見られる。観『名』(僧下五五ウ7)に「アラス(平平上濁○)」とある。

## アラタニ(更)

○而<sup>アラタ</sup>て更<sup>ニ</sup>に生タリ〔『梅本』卷上・序・1③〕

『集成』には、「アラタム」に十数例が見られる。蓮成院本『類聚名義抄』(下一六五才3)(以下蓮『名』と略称)に「アラタニ」と見えるが、観『名』・図『名』等には見えない。

## アラハス(彰)

○己か美を揚<sup>ア</sup>ケ顕<sup>アラハ</sup>し彰<sup>サ</sup>使<sup>シ</sup>む〔也〕〔『書本』卷上・養身第二・12⑥〕

『梅本』には「彰ハレ使ルソ〔也〕」と見える。

『集成』には、「アラハス」の他「アラハル・アラハ・アキラカ・カタチ」等の和訓が示されてある。観『名』(佛下本一七ウ1)に「アラハス(平平○○)」と見える。

## アラハル（見・形）

○世に〔於〕<sup>アラハ</sup>見レむと欲シ（『梅本』卷上・序・1②）

○長【平】短【上】（の）〔之〕<sup>アラハ</sup>相形レ（『梅本』卷上・養身第二・13③）

『書本』も「見レ」<sup>アラハ</sup>「形レ」<sup>アラハ</sup>と加点する。

『集成』には、「見」「形」字共に「アラハル」「アラハス」等十数語の和訓が示されてある。

「見」字については、観『名』（佛中四二オ1）に「アラハス（平平〇平）」、「形」字については、観『名』（佛下本一七オ8）に「アラハス（平平〇上）」と見られる。

## アル（蕪）

○田は甚（だ）<sup>ア</sup>蕪レタリ（『梅本』卷下・益證第五十三・181②）

因みに、『書本』『群本』にも「蕪レタリ」<sup>ア</sup>「蕪レタリ」と見える。

『集成』には、「荒」<sup>アレタルコト</sup>「蕪」<sup>アレアレテ</sup>「荒」<sup>アレタルコト</sup>「蕪」<sup>アレアレテ</sup>（『大唐西域記』等の例が示されてある。観『名』には見えない訓である。

## イキトホリ（紛・忿）

○其（の）<sup>イキトホリ</sup>紛<sup>イキトホリ</sup>を解キ（『梅本』卷上・舞源第四・19②）

『書本』には、右傍に「イキトフリト」とあり、左傍には「芳云反 憤也」とある。

『集成』には、『老子道德経』の当該例のみが示されてある。観『名』（法中六〇オ7）に「イキトホリ（平平平濁平平）」とある。

○其の<sup>イキトホリ</sup>忿<sup>イキトホリ</sup>【左傍に「芳云反」と字音注記がある】を解ク（『書本』卷上・舞源第四・19②）

『書本』も左傍に「イキトフリ」と加点する。

『集成』には、大東急記念文庫蔵保安四年点『辨正論』の例が一例見えるに過ぎない。観『名』には「忿」字に「イキドホル」訓は見られない。

## イコフ(活)

○其の身を活フ〔也〕『梅本』巻下・任為第七十三・249⑤

当該箇所を『書本』は「其(の)身を活す〔也〕」と加点する。因みに、『梅本』『書本』(巻下・任為第七十三・249⑥)共に、割注に於いて「身を活フルを」と加点している。

『集成』には、『法華經單字』(活)『冥報記』(活)の例が示されている。観『名』(法上九才8)に「イコフ」とある。図『名』(四三七)にも「イコフ(平平上)」とある。

## イサギヨシ(清)

○天、一を得(て)以て清シ『書本』巻下・法文第三十九・136②

『書本』においては、左傍に「イサキヨシ」右傍に「キヨシ」とある。因みに、『群本』には右傍に「イサキヨシ」左傍に「キヨシ」と加点する。

『集成』には、「イサギヨシ・イサギヨウス・キヨシ」等の他十数語の和訓が示されている。「イサギヨシ」については、穂久邇文庫本『五行大義』等の例が示されている。観『名』(法上一三才4)に「イサキヨシ」とある。図『名』(一一5)にも「イサキヨシ(上上上濁上平)」と見える。

## イザナフ(唱)

○謙退【去】を執(りて)唱イ始ムルことを為セ(ず)〔也〕『梅本』巻下・三寶第六十七・234④

因みに、『梅本』には左傍に「倡トナへ」とみえる。

『群本』にも『梅本』と同一の加点がみられるが、『書本』には「倡」字に「イザナヒ」と加点する。

『集成』に「唱」字に「イザナフ」は見えない。『書本』に見るように「倡」字に「イザナヒ」「イザナフ」の他に「アソブ・タノシム・クグツマハシ」等の訓が見える。因みに、『集成』の「倡」字の「イザナヒ」の例は東山御文庫本『古文尚書』を挙げている。

観『名』（佛中二三ウ2）に「イサナフ（平平濁上平）」とある。因みに、高山寺本『類聚名義抄（三寶類字集）』（以下高『名』と略称）（七〇ウ4）にも「イサナフ（平平濁上平）」と見える。

### イタツカハシ（勞・煩）

○甘泉を得、<sup>イタツカハ</sup>勞【去】シキコト而て怨ミ（ず）「不」（『梅本』卷上・象元第廿五・88①）

当該箇所にも、『書本』は右傍に「イ」、左傍に「ラウ」、『群本』は左傍に「ラウ」と加点する。

○令、煩シキときは則（ち）<sup>ワツラヘ</sup>奸生る（『書本』卷下・涼風第五十七・196①）

因みに、『群本』は「煩シキトキンハ」、『書本』は「煩シキときは」と加点する。

『集成』には、「煩」字の例は多く示されている。「勞」字については、鎌面学園蔵『観弥勒上生兜率天経賛卷下』の「勞（し）く」の例が示されているに過ぎない。

「煩」字は、観『名』（佛下本一七オ4）に「イタツカハシ（〇平〇上〇〇）」、「勞」字についても「イタツカハシ（平平〇〇〇）」（僧上四三オ2）とある。因みに、蓮成院本『類聚名義抄』（以下蓮『名』と略称）には「イタツカハシ（平平平平上）」と見える。

### イタル（之・若）

○正を以(て) 国に之<sup>イタ</sup>ラシム『梅本』『書本』卷下・涼風五十七・194⑤

因みに、割注部に『梅本』は「之<sup>シ</sup>至【上】也」、『書本』は「之<sup>シ</sup>至也」と義注する。

○大【去】愚【上】の身に若<sup>イタ</sup>ラン<sup>コト</sup>を貴<sup>オソ</sup>レ「」(『梅本』卷上・厭恥第十三・42⑤)

○大愚【去】(の) 身に若<sup>イタ</sup>ラン<sup>コト</sup>を貴<sup>オソ</sup>リて『書本』卷上・厭恥第十三・42⑤

因みに、『梅本』『書本』には、各々「若<sup>シヤク</sup>は至<sup>シ</sup>也」「若【入濁】は至【上】也」と割注する。

『集成』の「之」字については、輪王寺蔵『金剛般若集驗記』『法華經單字』の例が示されてある。「若」字に「イタル」訓は見えない。

観『名』(法下二二ウ4) には「之」字に「イタル」、『同』(僧上二五オ5) には「若」字に「イタル(上上平)」とある。

## イツハリ(奇・詳)

○奇<sup>イツハリ</sup>を以(て) 兵を用(ゐ) シメン『梅本』卷下・涼風五十七・194⑥

○奇<sup>イツハリ</sup>を以(て) 兵を用キシム『書本』卷下・涼風五十七・194⑥

因みに、『梅本』『書本』に「奇詐也」「奇詐<sup>サ</sup>也」と義注する。

○我則(ち) 詳<sup>イツハ</sup>リ愚<sup>ハ</sup>ニシテ、不背ナルに似タリ【口也】(『梅本』卷下・三寶第六十七・233①)

『書本』も「詳<sup>イツハリ</sup>リ愚<sup>ハ</sup>(にし)て」と加點してある。

『集成』には、「奇」字に「イツハリ」と訓する例は見えない。「詳」字の「イツハリ」訓については、毛利報公会延久五年点『史記呂后本紀』の例を含む七例が見られる。

「奇」字は観『名』(法上四七ウ1) に「イツハル(平平○○)」、「詳」字は観『名』(法上二九ウ2) に「イツハル」、

図『名』(九〇二)に「イツハル(平平上平)」と見える。

### イヘ(屋)

○其の茅【平濁】茨を安ムシ文飭【入】の「之」屋を好(ま)ず「不」也『梅本』巻下・獨立つ第八十・270③  
『書本』『群本』には仮名点はない。

『集成』には、「イヘ」に「屋」字は見えない。観『名』にも、「屋」字に「イヘ」訓は見られない。

### イマ(今日・此)

○吾、今日、老子を見ルに『梅本』巻上・序・3⑤

『書本』には右例は「今日」と加點されている。

○此を以てなり『梅本』巻上・虚心第廿一・72③

○此を以(て)なり『書本』巻上・虚心第廿一・72③

因みに、「此は今【平】なり【也】」『梅本』、「此は今也」『書本』と義注する。

『集成』には、「イマ」に「今日」「此」字の例は見られない。

「今日」について観『名』(佛中四四才6)に「イマ」とあるが、「此」字に「イマ」訓は見られない。

### イヤシ(雌・微・細)

○其の雌イヤシキを守(る)ときは天下タニタ谿タニ為り【「雌」字の左傍には「ノチ」と加點する。】『書本』巻上・反朴第廿八・

96④

当該箇所を『梅本』は、右傍に「ノチ」、左傍に「メ」と加點。

○我常に無欲にシて華文【平濁】を去テ、服飭イヤを微シクス『梅本』巻下・涼風五十七・198④

『書本』は「微<sup>イ</sup>シウする」と加点する。

『集成』には「微」字の「イヤシ」訓の例を六例示してある。

○其レ細シ【右傍に「スコシ」、左傍に「述小也」】(『梅本』巻下・三寶第六十七・233⑥)  
当該箇所を、『書本』は「其れ細シケレはなり〔也〕」と加点する。

『集成』には、高山寺藏『莊子』の「細<sup>イヤシキ</sup>人」の一例のみが示されてある。

観『名』(佛上二二ウ7)には「微」字に「イヤシ」とあるが、「雌」「細」字には見られない。

## イヨイヨ(兪)

○動(き)而<sup>テ</sup>兪<sup>イヨイヨ</sup> 出ツ【左傍に「イタス」と加点】(『梅本』巻上・虚用第五・22②)

『書本』には「イヨイヨ」とのみ加点。

『集成』には、保延二年『法華經單字』、至徳三年『法華經音訓』の二点の例のみが示されている。

観『名』(法中四五オ8)に「イヨ／＼(上上○○)」とある。

## イル(投)

○兪【去】モ其の角を投<sup>イ</sup>ル、所無ク(『梅本』巻下・貴生第五十・173②)

『書本』は「投<sup>ト</sup>する」【「投」字に「六(音)頭」の類音注】と加点する。

『集成』には、「投」字に「イル」の他二十数語の和訓が示されている。観『名』には見られない訓である。

## ウ(足)

○視レトモ「之」、見<sup>ミ</sup>ウルコトを足<sup>エ</sup>(ず)「不」(『梅本』巻上・仁徳第卅五・124③)



○視（れ）とも「之」見<sup>ミ</sup>ルこと足<sup>エ</sup>不<sup>ス</sup>（『書本』卷上・仁徳第卅五・124③）

因みに、『梅本』『書本』には、割注に「足【入】は得【入】（なり）【也】」「足は得（なり）【也】」と見える。

『集成』の「足」字の「ウ」訓は、『老子道德経』の当該例のみが示されてある。観『名』には見えない訓である。

### ウガツ（貫）

○水能（く）堅を貫<sup>ウカ</sup>ち、剛に入（れ）通<sup>ス</sup>セ不<sup>ス</sup>（『梅本』卷下・偏用第四十三・152③）

『書本』『群本』も、「貫」字に「ウカチ」と加点する。

『集成』には、「ウガツ」に「貫」字の掲出はない。観『名』（佛中一三ウ3）に「ウカツ」と見える。

### ウク（閱）

○以て衆ニ甫<sup>ヘシメ</sup>を閱<sup>ウク</sup>ケシム【「閱ケシム」字の左傍には「ウク」とあり、合点を付す】（『梅本』卷上・虚心第廿一・

71⑥）

因みに『書本』も「閱<sup>ウク</sup>ケシム」と見える。『梅本』『書本』には、「閱は稟<sup>ム</sup>【上】也」「閱【入】は稟也」「閱【入】は稟<sup>ム</sup>也」と義注する。

『集成』には、「ウク」に「閱」字の掲出は無いが、義注として示された「稟」字を「ウク」と訓む例は多く示されている。観『名』には見えない。

### ウシナフ（脱・無）

○魚をは洩<sup>ウシナ</sup>に【於】脱<sup>ウシナ</sup>フ（べからず）【不可】【脱】字の右傍には「タツ」、左傍には「ハナツ」と加点】（『梅本』

卷上・微明第卅六・126⑤）

因みに、『書本』は、「ハナツ」と訓む。

○人君の其(の)身を正(しく)せ(ざる)「不」ときは、其(の)国を無<sup>ウシナ</sup>フと謂(ふ)「也」『書本』卷下・順佗  
第五十八・201②

因みに、当該箇所を『梅本』は「ナイカシロニス」と加点する。

『集成』には、「ウシナフ」に「脱」「無」字は見られない。観『名』にも両字に「ウシナフ」訓は見られない。

ウツス(徒)↓ウツル(徒)

○遠ク徒<sup>ウツ</sup>サ(ず)「不」『群本』卷下・獨立第八十・269①

ウツル(徒)↓ウツス(徒)

○而して遠ク、徒<sup>ウツ</sup>ラ(ず)「不」『梅本』卷下・獨立第八十・269①

因みに、『書本』は「ウツル」と加点する。

『集成』には、「徒」字に「ウツス」「ウツル」訓例は多く見られる。観『名』(佛上二三オ7)に「ウツス(〇〇上)」「ウツル」と見える。因みに、高『名』(二二オ6)に「ウツス(上上上)」「ウツル(上上〇)と見える。

ウベナフ(諸)

○夫れ、輕<sup>カロカロ</sup>シク<sup>ウヘナ</sup>諾<sup>ウヘナ</sup>【入濁】「ウヘナフ」は左傍に加点。別に、「する」のオコト点が見える【フときは必ず信  
寡<sup>スケナ</sup>シ『書本』卷下・恩始第六十三・218①

『梅本』には「諾【入】スルときは」、『群本』には「諾【入濁】スルトキンハ」とある。

『集成』には、東寺金剛藏院政期点『唐大和上東征傳』、天理図書館蔵久寿二年点『三教指歸』の二例が見られる。  
観『名』には見えない訓である。

ウラム(售)

○賣<sup>ウ</sup>(る) 者は疾<sup>ト</sup>ク售<sup>ウ</sup>ムコトヲ欲す〔也〕(『梅本』卷下・為道第六十二・213③)

因みに、『梅本』の左傍には「アキナフ・ヒサク」、『書本』の右傍には「アキナハン」、左傍には「ヒサカン」と見える。『集成』には、「ウラム」に「售」字は見られない。観『名』にも見えない訓である。

### オギヌフ(補)

○足<sup>タ</sup>ラ(ぎ) ル「不」に補<sup>フキヌ</sup>フ(『梅本』卷下・天道第七十七・261②)

『書本』にも「ヲキヌフ」と加点する。

『集成』には、「オギヌフ」の例が十数例示されている。因みに、「オギヌフ」以外に「オキノル」「オクノフ」「オコヌフ」「オコノフ」等の語形も見られる。観『名』(法中七四オ8)にも「オキヌフ(上上上平)」と見える。

### オコス(彊)

○必(ず) 固<sup>マコト</sup>に彊<sup>オス</sup>ス〔将〕(『梅本』卷上・微明第卅六・125⑥)

因みに、『梅本』の左傍には「コワフス」とある。ところで、当該箇所は『書本』(125⑤)には「強<sup>コハク</sup>す」とある。『集成』には、「彊」字を「オコス」と訓む例は見えない。観『名』には見えない訓である。

### オコタル(懈)

○當に懈<sup>ヤコタ</sup>リ怠<sup>ヤコタ</sup>ル(べから)〔當〕不〔也〕(『梅本』卷下・守微第六十四・223④)

因みに『書本』にも「懈<sup>ヤコタ</sup>リ」とある。『群本』には「懈<sup>ヤコタ</sup>リ」と加点する。

『集成』には、「懈」字を「オコタル」「ヲコタル」と加点した例を多く挙げている。観『名』(法中五二オ3)に「オコタル(上上〇〇)」と見える。

## オコル（作）

○而も峻【平】作【入】する【峻作】の左傍に「ヒ、ノオコル」と見える【こと精の「之」至レルなり（也）『書本』卷下・玄符第五十五・189②）

因みに、『梅本』には「賸作スルコト」とある。

『集成』には、「オコル」と訓む例を多く示す。観『名』には、「オコル」訓は見られない。

## オゴル（矜）

○自（ら）矜レル者は長カラ（ず）「不」『梅本』卷上・善思第廿四・82⑤）

当該箇所は、『群本』には「矜イナリトスル」とあり、左傍に「大也」と義注の加点がある。『書本』は「矜する」と加点する。

『集成』には、「オゴル」の例（「ヲコル」を含む）を六例示す。観『名』（僧中一九ウ）にも「オコル」と見える。

## オサフ（挫）

○當に挫へ止メて「之」道の自見（せ）不ルに法ル當シ（也）『梅本』卷上・穰源第四・19①）

『書本』は「挫シテ」と加点しる。

『集成』には、『成唯識論演秘卷第五』（「オサへて」）天理図書館蔵『大般若経音義』（「ヲサフ」）の例が示されてある。観『名』（佛下本三三オ）に「オサフ（上平上）」とある。

## オソル（貴）

○大【去】患【上】の身に若ランことを貴レ「」『梅本』卷上・厭恥第十三・42⑤）

○大患【去】（の）身に若ランことを貴りて『書本』卷上・厭恥第十三・42⑤）

因みに、『梅本』『書本』には、「貴は畏<sup>ホ</sup>【上】也」「貴は畏【去】也」と割注する。なお、「オソレ」「オソリ」と活用の種類の違いがみられる。

『集成』には、「貴」字に「オソル」訓は見えない。観『名』（佛下本九ウ6）には、「オソル（平平〇）」とある。

### オタマシヒ（魂）

○肝（は）<sup>オタマシヒ</sup> 魂<sup>オサ</sup> 【平】を蔵メ『書本』巻上・成象第六・23③

因みに、『梅本』は無加点。

『集成』には、「魂」字に「オタマシヒ」訓は見えない。観『名』にも見られない訓である。

### オトス（滅）

○精神を傷<sup>ヤフ</sup>（り）壽を滅<sup>オト</sup>シ、年を消ス<sup>ケ</sup>【也】『書本』巻下・知病第七十一・246⑤

因みに、『梅本』は「滅シ」と加点する。

『集成』には、京都国立博物館蔵『文集』（「オトシ」）、天理図書館蔵『三教指帰』（「オトス」）の例が示されている。観『名』には見られない。

### オビヤカス（劫）

○生（ける）トキハ攻<sup>セ</sup>メ 劫<sup>ヲビヤカ</sup>サル、【之】憂<sup>ウレ</sup>へ有リ『梅本』巻下・立成第四十四・155④

○生（ける）ときは攻<sup>セ</sup>メ 劫<sup>ヲビヤカ</sup>サル、【之】憂<sup>ウレ</sup>有（り）『書本』巻下・立成第四十四・155④

因みに、『群本』は「攻劫」を音読する。

『集成』には、輪王寺蔵『金剛般若集驗記』、興福寺蔵『大慈恩寺三蔵法師傳』等の用例が示されている。観『名』には見られない。

## オホキナリ（矜）

○自（ら）<sup>ミ</sup> 矜<sup>オホ</sup>キカラ<sup>ス</sup>不<sup>ス</sup> 『梅本』 卷上・益謙第廿二・75④

○自（ら） 矜<sup>オホ</sup>キにせ不<sup>オホ</sup> 『書本』 卷上・益謙第廿二・75④

○自（ら） 矜<sup>オホ</sup>キニセ（ず）「不」 『群本』 卷上・益謙第廿二・75④

『梅本』『群本』の左傍に「大也」の義注がある。また割注として、『梅本』には「矜<sup>キヨウケウ</sup>【平】は大【去】也」、『書本』には「矜<sup>クキョウ</sup>は大也」とある。

『集成』には、「矜」字に「オホキナリ」の訓は見えない。因みに、『集成』には「アハレブ・アハレミ・アハレム・オゴル・カシコシ・カナシブ・タカブ・タフトシ・ホコル・メグミ・メグム・メゴム」等の訓が見られる。

観『名』（僧中十九ウ6）には「オホキニス（平平平〇〇）」とある。因みに、蓮『名』は「矜」字の「今」を「令」に作り「オホキニス（平平平〇〇）」とある。

## オボメク（訥）

○大辯は訥<sup>オボメ</sup>クか若（し） 『梅本』 卷下・洪徳第四十四・159②

○大辯は訥<sup>ヲボメ</sup>クか若シ 『群本』 卷下・洪徳第四十四・159②

割注部にも『梅本』に「訥<sup>メ</sup>クカ」、『群本』に「訥<sup>ヲボメ</sup>クか」と加点する。因みに、『書本』は「訥<sup>トッ</sup>【入濁】ナル」と音読する。

『集成』には、「訥」字に「オソシ」「ニラグ」とみえるが、「オボメク」は見えない。観『名』（法上三七ウ6）には「オボメク（上上濁〇〇）」とある。

## オモムク（徼）

○常に有欲にして以て其(の) オモムキ 微を觀ル(『梅本』卷上・體道第一・11①)  
『書本』も「オモムキ」と加點する。割注部には、『梅本』に「ケウ微(は)歸【平】也」、『書本』に「ケウ微【去】は歸【平】也」とみえる。『集成』・『觀』・『名』共に見られない訓である。

### オモムミル(者以)

○者 オモンミル 以禮【上】記に曾【平】子【上】は礼を孔子に〔於〕問フ(『梅本』卷上・序・5⑥)  
『書本』は、「うことを(は)〔者〕、以ミルに」と加點する。『集成』・『觀』・『名』共に見られない。

### オヨグ(游)

○吾レ其ノ能ク游オヨクことを知レリ(『梅本』卷上・序・3②)  
『書本』も同じく加點する。

『集成』には、神宮文庫本正和三年点『古文尚書』を含む三例が示されている。『觀』・『名』(法上一〇オ8)に「オヨク(平平上濁)」と見える。

### オヨブ(逮)

○鄙に似(る) (は) 逮オヨハ不(るか) 若シ〔也〕(『梅本』卷上・異俗第廿・69④)  
○鄙に似(る) (は) 逮オヨハ不(る) か若シ〔也〕(『書本』卷上・異俗第廿・69④)  
『集成』には、「逮」字を「オヨブ・ヲヨブ」と訓む例が五十数例示されている。

高『名』(二五ウ5)には「オヨホス(〇上〇〇) 平濁」と見えるが、『觀』・『名』(佛上二六ウ4)には「ヲヨホフス」、西念寺本『類聚名義抄』(以下「西『名』と略称)には「オヨホス」とある。

## カカグ（攘）

○攘<sup>カ、ムキ</sup>クルに臂<sup>タムキ</sup>無シ『梅本』卷下・玄用第六十九・240④

○攘<sup>カ、ムキ</sup>クルに臂<sup>タムキ</sup>無ク『書本』卷下・玄用第六十九・240④

『集成』には、「攘」字を「カカグ」と訓む例として、興福寺蔵『大慈恩寺三蔵法師傳』、法隆寺蔵『辨正論』、天理図書館蔵『三教指帰』等の例が見られる。

観『名』（佛下本三五ウ6）に「カ、ク（平上〇）」「カ、クル（平上上濁〇）」と見える。

## カガマル（死）

○民、老（い）死<sup>カ、マ</sup>ルに至（る）マ（て）に『書本』卷下・獨立第八十・270⑤

『群本』も「死ル」と加点するので、「カ、マル」と訓むか。『梅本』は「老死」を音読する。

『集成』には、「老死」に「カ、マリテ」と加点する、京都国立博物館蔵天永四年点『文集』の例が見られるが、「死」字に「カガマル」訓は見られない。観『名』にも見られない訓である。

## カカル（羅）

○何<sup>イカ、ナ</sup>者<sup>イカ、ナ</sup>レハ彼の「之」民<sup>ミ</sup>の罪<sup>ミ</sup>天に「於」羅<sup>カ</sup>リ、『梅本』卷下・玄用第六十九・241③

○何<sup>イカ、ナ</sup>者<sup>イカ、ナ</sup>レハ彼の「之」民<sup>ミ</sup>、罪を天に「於」羅<sup>カ</sup>リ、『書本』卷下・玄用第六十九・241③

『集成』には、「羅」字を「カカル」と訓む例として、楊守敬旧蔵『将門記』、東大寺図書館蔵『大般涅槃經』平安後期点、吉水蔵『諸仏菩薩本誓願要文集』等の例を初めとして十例の指摘がある。観『名』（僧中七才6）にも「カ、ル（平上・平上〇）」と見える。

## カクス（伏）



○聖人は光を伏サ<sup>カ</sup>ンコトヲ欲す『梅本』巻下・守微第六十四・224①

○聖人は光<sup>ヒカリ</sup>を伏サ<sup>カク</sup>ンことを欲す『書本』巻下・守微第六十四・224①

『集成』には、保延二年本『法華經單字』至徳三年本『法華經音訓』の二例が示されている。因みに、「伏」字には「カクス」「カクル」「カクレ」等の他に十数例の和訓が見られる。観『名』（佛上一〇才）にも「カクス（平上平）」とある。

### カシラカカフ（蓬累）

○其の人を得<sup>（マ）</sup>不<sup>（マ）</sup>レときは、則（ち）、蓬<sup>カシラカ、</sup>累<sup>（マ）</sup>ヘ而行ク『梅本』巻上・序・2④

○其の人を得<sup>（マ）</sup>不<sup>（マ）</sup>（る）ときは、則（ち）、蓬<sup>カシラカ、</sup>累<sup>（マ）</sup>ヘテ而行ル【左傍に「ユク・ニク」とある】『書本』巻上・序・2④  
因みに、「蓬累」字に『梅本』には「ミタリカハシウ」、『書本』には「カシラカ、ヘミタリカハシウ」との加点も見られる。

『集成』には、「蓬累」字を「カシラカ、エテ」と加点する例として、大槻文彦蔵『老子道德經』の例が示されており、「蓬」字に「カシラカ、ヘテ」と加点する例として、大谷大学蔵『三教指帰注集』長承三年点の例が示されている。観『名』（僧上二〇才）に「カシラカ、フ（平平平〇〇）」とある。

### カタチ（物・質・状・象・容）

○物<sup>カタチ</sup>無<sup>（マ）</sup>（き）に「於」復<sup>フク</sup>歸<sup>（マ）</sup>す『梅本』巻上・賛玄第十四・48⑤

○復<sup>カヘ</sup>て當<sup>（マ）</sup>に之<sup>（マ）</sup>を質<sup>カタチ</sup>無<sup>（マ）</sup>（き）に「於」歸<sup>（マ）</sup>ス當<sup>（マ）</sup>ス『梅本』巻上・賛玄第十四・48⑤

○是<sup>（マ）</sup>を無<sup>（マ）</sup>【平濁】<sup>（マ）</sup>状<sup>シヤウ</sup>ノ「之」<sup>（マ）</sup>状<sup>（マ）</sup>と謂<sup>（マ）</sup>フ『梅本』巻上・賛玄第十四・48⑤

○無<sup>（マ）</sup>物の「之」<sup>（マ）</sup>象<sup>（マ）</sup>『書本』巻上・賛玄第十四・49①

○彊<sup>シヒ</sup>て之<sup>コ</sup>の容<sup>カ</sup>を為<sup>ツク</sup>ル（『梅本』卷上・贊玄第十四・51①）

因みに、「物」字「状」字については、『書本』も「カタチ」と加点するが、「質」字は「無質」と音読する。「象」字は、『梅本』は「象<sup>シヤカ</sup>」【去】と加点する。なお、「物」字の該当箇所の割注に「物は質【入】也」（『梅本』・「物は質也」（『書本』とある。『書本』も「容<sup>カ</sup>」と加点する。

『集成』には、「象」字の例として、東寺金剛藏保安元年点『大毘盧遮那經疏』至徳三年本『法華經音訓』の二例、「質」字の例として、東大寺図書館藏平安後期点『大般涅槃經』石山寺藏保延三年点『俱舍頌疏』天理図書館藏弘安九年寫『大般若經音義』（九例）等十数例、「状」字の例は、多く二十数例が見られる。「物」字に「カタチ」と加点する例は見られない。「容」字に「カタチ」と加点する例は四〇数例見られる。

観『名』（佛下本一一オ3）に、「質」字に「カタチ」、（佛下末四ウ6）に「物」字に「カタチ（上上〇）」、（佛下末五ウ8）（法上五オ1）（佛下本六六オ4）に「状」字に「カタチ」「カタチ（上上上）」とある。（佛下一六オ7）（僧下五五ウ6）に「カタチ」「カタチ（上上〇）」とある。「象」字についても「カタチ」（佛下末一六オ7）、「カタチ（上上〇）」（僧下五五ウ6）と見える。「容」字に「カタチ」訓は見えない。

### カタドル（象）

○帝ノ「之」先に象ル<sup>カタ</sup>【「象」字の左傍に「ノトル」】（『梅本』卷上・無源第四・20②）

○帝（の）先に象ル<sup>サキ</sup>（『書本』卷上・無源第四・20②）

『集成』には、「象」字に「カタドル」と訓する例として、三十余例が示されている。観『名』（佛下末一六オ7）（僧下五五ウ6）に「カタトル（上上〇〇）」「カタトル（上上上濁平）」と見える。

### カタナス（結）

○結ス者は繩【平】約【去】無（し）（『梅本』巻上・巧用第廿七・93④）

○結す【左傍に「ムスフ」者は繩【平】約【去】無（し）（『書本』巻上・巧用第廿七・93④）

『集成』中の「結」字には、二十種の和訓が挙げられているが「カタナス」は見えない。

図『名』（三〇一七）に「カタナス（上上上平）」と見える。なお、観『名』（法中六二オ一）には、「カタナル（上上〇）」とあり、「ル」の右傍に「ス」とある。

### カツ（尅）

○重（ね）て徳を積（む）トキハ則（ち）尅タ（ず）「不」ト云（ふ）こと無（し）（『梅本』巻下・守道第五十九・204②）

『書本』には右傍に「カツ」左傍に「カタ」と加点する。両本の巻下・守道第五十九・204④にも「尅タ」と加点する例が見える。なお、『梅本』には「尅【入】を勝【入】也」、『書本』には「尅【入】は勝也」と割注部に見える。

『集成』には、石山寺藏長寛元年点『大唐西域記』、高山寺藏鎌倉中期点『莊子』、穂久邇文庫蔵元弘三年寫『五行大義』の例が示されてある。観『名』（法下七三ウ４）に「カツ（平上）」と見える。

### カナシキカナ（也哉）

○道に非（ぎ）る也哉（『書本』巻下・益證第五十三・182③）

○道に非ス【「ス」に合点あり。「非」字の左傍に「アラサルカナ」と見える。】（『群本』巻下・益證第五十三・182③）  
因みに、『梅本』には「也哉」とある。

『集成』・観『名』には見られない例である。

### カナシブ（憐）

○貴(く)シては當に賤を憐<sup>カナシ</sup>フ當シ(『梅本』卷上・運夷第九・31②)  
『書本』には「憐<sup>ア</sup>」、「群本」には「憐フ」と加點がある。

『集成』には、保延二年『法華經單字』他七例が示されている。図『名』(二五五2)に「カナシフ(上上上平濁)」とある。因みに、観『名』には見られない。

### カヌ(懷)

○山を懷<sup>カ</sup>ネ、陵<sup>フカ</sup>に裏<sup>ノホ</sup>リ鐵を摩<sup>ス</sup>リ、(『書本』卷下・任信第七十八・263③)

因みに、『梅本』には「懷」字の右傍に「包也」と義注する。

『集成』には、東洋文庫本鎌倉初期寫『史記夏本紀』金澤文庫本弘安四年寫『弘決外典鈔』等八例が示されている。

観『名』(法中四四ウ4)に「懷」字に「カネタリ(平上〇〇)」とあり、「ネ」の右傍に「ヌ(上)」とある。

### カハル(渝)

○質【入】直【入】は渝<sup>カハ</sup>ル【左傍に「アサキ」と加點】か若(し)(『梅本』卷下・同異第四十一・147①)

『集成』には、大槻文彦藏天正六年寫『老子道德經』の例が示されている。

観『名』(法上六ウ5)に「カハル」、図『名』(二三1)に「カハル(〇上〇)」とある。蓮成院本『類聚名義抄』(中一・八ウ1・以下「蓮『名』と略称)には「カハル(上上〇)」とある。

### カヘル(渝)

○質直は渝<sup>カハ</sup>ルか若し(『書本』147①)

『集成』には「カハル」は見えるが「カヘル」の例は見えない。観『名』(法上六ウ5)に「カヘル」とあり、図『名』(二三1)に「カヘス(平〇〇)」と見える。

## カル（稿・死）

○其レ死ルゝときは「也」枯レ稿レヌ【上記の訓は左傍にあり、右傍には「枯稿す」とある。】（『梅本』巻下・戒強第七十六・259①）

○其れ死ル（る）【左傍に「カレヌル」と加點】ときは「也」、枯稿【上】なり（『書本』巻下・戒強第七十六・259①）

『集成』には、「稿」字の例として、法隆寺藏保安四年点『辨正論』・保延二年寫『法華經單字』の例が示されている。「死」字に「カル」と訓する例としては十数例が示されてある。観『名』（佛下本五三才7）に「稿」字に「カル（上平）」、『同』（法下六八ウ4）には「死」字に「カル（上平）」と見られる。

## キハマル（勝）

○蹠シキこと勝レルときは寒し（『梅本』巻下・洪徳四十五・159③）

○躁しきことに勝（リ）ては寒し（『書本』巻下・洪徳四十五・159③）

因みに、『梅本』『書本』共に、割注部に「勝【去】は極【入】（なり）【也】」と義注が見える。

『集成』には、「勝」字に「キハマル」と加點する例は見られない。観『名』にも見えない訓である。

## キル（闔）

○天門開ケ闔ル【別に「トツ」「カル」とも加點】（『梅本』巻上・能為第十・35③）

○天【平】門【平】開【平】闔【入】ル（『書本』巻上・能為第十・35③）

『書本』には、「闔」字に「六（音）合」と字音注の加點も見られる。

『集成』には、石山寺藏長暦四年点『金剛界念誦次第私記』の例一例が示されている。観『名』には見えない。

## ククル(潜)

○道は潜<sup>カク</sup>リ隠<sup>カク</sup>れて人を(して)〔使〕能<sup>□</sup>ク指<sup>□</sup>シ名クルコト无カラ使<sup>シ</sup>【シ】は左傍【ム(也)】(『梅本』卷下・同異第四十一・147⑥)

『書本』は「道は潜<sup>カク</sup>レ隠<sup>カク</sup>(れて)」と加点する。

『集成』には、「潜」字に「ククル」と訓する用例は八例見える。観『名』(法上一三ウ8)に「タ<sup>マ</sup>、ル(平平上濁<sup>マ</sup>)」、図『名』(二三6)に「ク、ル(平平濁上)」とある。

## クジク(屈)

○大【去】直【入】は屈<sup>クシ</sup>ケタルか若シ『梅本』卷下・洪徳第四十五・158④)

『書本』『群本』も「クシク」と加点する。

『集成』には、「屈」字に「クジク」と加点する例として、宮内庁書陵部蔵『日本書紀』、東洋文庫蔵至徳三年『法華経音訓』および「枉屈」に「マ(ケ)クシカレタルコトクオホス」(宮内庁書陵部『日本書紀』の三例を示してある。観『名』(法下四五ウ4)にも「クシク(上上濁○)」とある。

## クチ(門)

○其(の)門<sup>クチ</sup>を閉(づる)ときは『梅本』卷下・歸元第五十二・177⑤)

『書本』も「門」字に「クチ」と加点される。なお、『梅本』には「門<sup>モン</sup>は口(なり)〔也〕」、『書本』にも「門は口(なり)〔也〕」と割注部に見える。

『集成』には「門」字に「クチ」と加点する例は見られない。観『名』にも見えない。

## クツガヘル(蹙)

○将に蹙<sup>クツカヘ</sup>ラン【「クツカヘル」は左傍にあり、右傍には「タフレン」とある】ことを恐(ぢ)ヨ(と)す【将】『梅本』卷下・法文第三十九・139<sup>③</sup>

○将に蹙<sup>クツカヘ</sup>ラン【「クツカヘル」は左傍にあり、右傍には「タフレン」とある】ことを恐(づ)〔べし〕【将】『書本』法文第三十九・139<sup>④</sup>

○将に蹙<sup>クツカヘ</sup>ラ(む)ことを恐(ぢ)ヨと将<sup>す</sup>【『群本』法文第三十九・139<sup>④</sup>】

『集成』には、「クツガヘル」に「蹙」字の例は見られない。観『名』にも見えない。

## クラ(奥)

○万物の〔之〕奥<sup>クラ</sup>なり【『書本』卷下・為道第六十二・212<sup>②</sup>】

『群本』には、左傍に「クラ」とあり、合点の合点が有る。右傍には「アウ」とある。割注部には「奥は蔵【去】(なり)〔也〕」【『梅本』『書本』、「奥【去】は蔵【去】(なり)〔也〕」【『群本』とある。

『集成』には、「クラ」に「奥」字の例は見られない。観『名』にも「奥」字に「クラ」は見えない。

## ケタ(方)

○能<sup>ケタ</sup>ク方に能<sup>マトカ</sup>(く)圓ニシテ【『梅本』卷上・易性第八・29<sup>⑤</sup>】  
『書本』も「ケタ」と加点する。

『集成』には、「方」字に「ケタ」とする例は十数例と多く見られる。観『名』(僧中一六ウ7)に「ケタニ(平上○)」とある。

## ケタル(辱)

○大白は辱<sup>ケタ</sup>レタル【「ケタ」の「タ」の右傍に「カ」か若(し)《梅本》卷下・同異第四十一・146③】  
『書本』は「辱<sup>ケカ</sup>レたるか」と加点する。

『集成』には、「ケタル」は見えない。観『名』にも見えない。

## ケヅル(劉)

○大匠に代リテ劉<sup>ケツ</sup>ルときは其(の)手を傷(ら)ず(不)《梅本》卷下・制惑第七十四・255①

『書本』も「劉<sup>ケツ</sup>(る)ときは」と加点する。『集成』には見当たらない字である。観『名』にも見えない訓である。

## ケフ(此)

○吾何<sup>レ</sup>を以て其の然ルことを知(る)トナラハ此<sup>ケフ</sup>【「ケフ」は左傍にあり、右傍の仮名点は不詳】(を)以(て)ナ  
リ《梅本》卷下・涼風第五十七・195③

『書本』は「此」字に「イマ」と加点する。割注部には、「此は今【平】(なり)〔也〕」《梅本》、「此は今(なり)〔也〕」  
《書本》とある。

『集成』には、「ケフ」に「此」字は見られない。観『名』(佛中四四〇七)に「此日」に「ケフ」と見えるが、「此」  
字のみに「ケフ」とするものはない。

## コトゴトク(弾・既)

○水、濁(り) 弾<sup>コトゴト</sup>ク【左傍に「ヒク」と加点】流(れ)て之(に)居り〔之〕《書本》卷上・易性第八・28④  
『梅本』には「争<sup>シ</sup>ヒ流(れ)テ」とあり、「弾」字は見えない。



○名アリト云は亦、既<sup>コト</sup>クに有り『梅本』卷下・聖徳第卅二・115④

『書本』も「コトコトクに」と加点する。「既【去】は盡【上】(なり)【也】」(『梅本』)、「既は盡【去】(なり)【也】」(『書本』)と割注に見える。

『集成』には、東寺金剛藏永保三年寫『觀自在大悲成就念誦儀軌』の「既く」の例が一例示されている。觀『名』(佛下末二ウ8)に「コト／＼ク(平上○○○)」とある。「彈」字には「コトゴトク」訓は見えない。但し、「彈」字を掲出し、「□(彈か、彈か)コト、／＼クニ」として、宮内庁書陵部藏保延四年点『文鏡秘府論』の例が一例示されている。

### コトコトニ(幾)

○水性・道與同(く)シテ幾<sup>コト</sup>ニス【「コトコトニス」は左傍にあり、「幾」字の右傍には「チカシ」と加点】『書本』

卷上・易性第八・28⑤

因みに、『梅本』は「幾<sup>ホトホト</sup>」と加点する。

『集成』には、「幾」字に「コトコトニ」と加点する例は見られない。觀『名』にも見えない訓である。

### コノム(喜)

○怒<sup>イカリ</sup>を喜<sup>コノ</sup>ムトキハ魂<sup>ウシナ</sup>を亡【平濁】フ『梅本』卷上・能為第十・32⑤

『書本』も「喜」字に「コノム」と加点する。因みに左傍に「許記反」と字音注記も見られる。

『集成』には、「喜」字に「コノム」と加点する例は二十数例見られる。觀『名』には見られない。

### コハシ(羸・彊)

○或(る)トキハ彊<sup>コハ</sup>ク、或(るとき)は羸<sup>コハ</sup>シ『梅本』卷上・無為第廿九・103④

『書本』も「彊<sup>コハ</sup>ク」「羸<sup>コハ</sup>シ」と加点する。

『集成』には、「コハシ」に「羸」字は見られない。

○果に（し）而彊<sup>デコス</sup>キ（右傍に「シフル」とあり、「コハキ」は左傍に加点する）こと勿レ『梅本』巻上儉武第三十・107④

『書本』『群本』は「強」字に作り、「シ（ふ）る」「シフル」と加点する。

『集成』には、東北大学蔵延久五年点『史記孝文本紀』を含む四例が示されている。なお、「彊」「羸」字ともに、観『名』には「コハシ」訓は見られない。

### コヤス（糞）

○治（むる）者<sup>ノ</sup>は陽精【平】を却イテ以て其の身を糞<sup>コヤ</sup>ス〔也〕（『梅本』巻下・儉欲第四十六・161③）  
『書本』も「糞<sup>コヤ</sup>ス」と加点する。『群本』は当該箇所を欠く。

『集成』には、「糞」字に「コヤス」訓の例は見えない。観『名』にも見えない訓である。

### コエシヒ（唾）↓コエカル（唾）

○終日<sup>ヒメミス</sup>に號<sup>ナゲ</sup>レ【上平平】トモ噉<sup>コエ</sup>カレ（ざる）〔不〕こと、（『梅本』巻下・玄符第五十五・189⑤）の「噉」字の右傍に「唾」字を補い、「オシナラ・コエシヒ・アイ」とする。

『集成』には、「コエシヒ」、次項の「コエカル」とともに掲出されていない。「唾」字には「オシ」「オフシ」「コワガル」の和訓が見られる。観『名』には見えない訓である。

### コエカル（唾）↓コエシヒ（唾）

○終日<sup>ナゲ</sup>に號<sup>ナゲ</sup>（れ）とも而て唾<sup>ナゲ</sup>【去】せ「唾」字の左傍に「アキトハ・コウエカレ・ムセハス」と見える【不<sup>ナ</sup>と（『書本』巻下・玄符第五十五・189④）

『集成』・観『名』ともに見えない和訓である。

### サイハヒ(祐)

○神明に祐サイハイ(せ)所ヲル『梅本』卷上・韜光第七・27③

『書本』は「祐タスケ所ヲル」と加点する。

『集成』には、東大寺図書館蔵平安後期点『大般涅槃經』の例等五例が示されている。観『名』(法下二ウ5)に「サイハヒ(上上上上)」とある。

### サカフ(忤)

○太ヘタ厚キ(く)シテ道ダカに違タカヒ天サカに忤サカヘ妄ユ(り)に行ユイテ紀キヲ失ナフヲ以てナリ「也」(『梅本』卷下・貴生第五十・172⑤)『書本』も「忤サカヘ」と加点する。

『集成』には、京都国立博物館蔵『日本書紀』、大谷大学蔵長承三年寫『三教指帰』の例等六例が見られる。観『名』(法中三七ウ5)にも「サカフ」、図『名』(二四五6)にも「サカフ(上上上上)」とある。

### サカユ(昌)

○国を治サカ(むる)ときは則サカ(ち)、国、富ム、民昌サカユ『書本』卷上・仁徳第卅五・125①

『梅本』は「昌サカヘ」と加点する。

『集成』には、知恩院蔵平安初期点『妙法蓮華經玄贊』、大東急記念文庫蔵承暦三年点『金光明最勝王經音義』、京都国立博物館蔵天永四年点『文集』の例が示されている。観『名』(佛中四四ウ2)に「サカユ(上上〇)」とある。高『名』(九三オ6)にも「サカユ(上上〇)」とある。

## サキ(雄)

○其(の)雄【左傍に「ヲ」】<sup>をヲ</sup>知リ其(の)雌【左傍に「メ」】<sup>をヲ</sup>守(り)『梅本』卷上・反朴第廿八・96④

○其(の)雄【「サキ」は左傍にあり、右傍には「タトキ」とある】<sup>を</sup>知(り)其(の)雌【左傍には「ノチ」と加點】<sup>イヤシキ</sup>  
を守(る)ときは『書本』卷上・反朴第廿八・96④

『集成』には、「サキ」に「雄」字は見られない。観『名』にも見られない。

## サク(去)

○嗜欲(を)除(きて)乱【去】煩【平】(を)去ク【也】『書本』卷上・安民第三・17②

『梅本』は「去ツ」とある。

○聖人は甚(を)去ケ『書本』卷上・無為第廿九・104①

○聖人は甚【去】(を)去ケ、奢【平】を去ケ、泰【去】を去ク『群本』卷上・無為第廿九・104①

『梅本』は「甚【上】を去【上】テ」とする。

『集成』には、「去」字に「サク」と加點する例は、八十数例が示されている。観『名』には見えない訓である。

## サグル(採)

○死(ぬる)トキハ冢ヲ堀リ<sup>ホ</sup>柩ヲ採ル【之】<sup>ウレヘ</sup>患有リ【也】『梅本』卷下・立成第四十四・155⑤

当該箇所は、「死(ぬる)ときは發キ掘ラル、【之】患」『書本』、「死(ぬ)ルトキンハ發キ掘ル【之】患」『群本』とある。

『集成』には、法隆寺藏天治三年点『大慈恩寺三藏法師傳』、吉水藏院政期点『真言浅深随聴記』からの二例が示されている。観『名』には見えない。

## サス(整)

○毒【入】虫、整、(ず)「不」(『梅本』巻下・玄符第五十五・188③)  
『書本』も「整、不」と加点する。

『集成』には、二十数例弱の例が示されてある。観『名』(僧下一〇ウ7)に「サス(平上)」とある。

## サムシ(吹)

○或(る)時(は)吹シ『梅本』巻上・無為第廿九・103③

『書本』も「吹シ」と加点する。割注部に「吹【平・去】は寒(なり)」「也」(『梅本』、「吹は寒(なり)」「也」(『書本』とある。

『集成』には、「サムシ」に「吹」字は見られない。観『名』(佛中二六オ7)に「サムシ」とある。因みに、高『名』(七三ウ6)には「平平上」と差声されている。

## サル(行)

○其の人を得不(る)ときは則(ち)蓬累し【右傍に「カシラカ、ヘテ」、左傍に「カシラカ、ヘミタリカハシウ」の加点がある】(て)【而】行ル【左傍に「ユク」「ニク」の加点がある】(『書本』巻上・序・2④)

『梅本』には「ユク」訓のみ。

『集成』には、「サル」に「行」字は見られない。観『名』(佛上二四ウ8)には「サル(上平)」とある。

## サワガシ(躁)

○静ナルは躁シキか君為リ(『梅本』巻上・重徳第廿六・89④)

『書本』『群本』も各々「躁シキ」【左傍に「祖到反」とある】「躁シキ」と加点する。

『集成』には、「躁」字の「サワグ」訓として五例が見られる。観『名』（法上三八ウ<sup>2</sup>）には「サハカシ（平平〇〇）<sup>平</sup>」と見える。

### シク（賦）

○下を賦<sup>シ</sup>キテ【左傍に「ノヘテ」と加点】自ら以て奉す【也】（『書本』卷下・論徳第三十八・133<sup>①</sup>）

『梅本』は「賦（して）」（無加点）

『集成』には、「シク」に「賦」字は見られない。観『名』（二オ6）には「シク（上平）」と見える。

### シタガフ（脩）

○成に因り、故に脩<sup>シタカ</sup>フ（『梅本』卷下・恩始第六十三・216<sup>①</sup>）

『書本』も「脩<sup>シタカ</sup>フ」と加点する。『集成』にも、前田育徳会蔵長治二年点『冥報記』を含む六例が見られる。観『名』には見られない。

### シツカナリ（安・寧・恬）

○身【平】躰【上】安<sup>シツカ</sup>ニシ而大【去】壽（なり）【之也】（『梅本』卷上・仁徳第卅五・123<sup>④</sup>）

○一を得（て）以て寧<sup>シツカ</sup>ナリ【「シツカナリ」は左傍にあり、右傍には「ヤスシ」と加点】（『書本』卷下・法文第

三十九・136<sup>②</sup>）

因みに、『群本』も『書本』と同じき加点をする。

○當に恬<sup>シツカ</sup>ナルこと嬰兒の造【去】為【平】スル所（『梅本』卷下・忘知第四十八・166<sup>④</sup>）

因みに、『書本』も「恬<sup>シツカ</sup>ナルこと」と加点する。

『集成』には、「安」字の例としては、京都国立博物館蔵天永四年点『文集』を含む六例が、「恬」の例としては、東寺金剛藏藏康平七年点『佛頂尊勝心破地獄法』を含む十例が示されてあるが、「寧」字の例は見られない。

観『名』(佛下末二五ウ8)には「安」字に「シツカナリ(平平濁平○○)」、「恬」字は『同』(法中四〇ウ6)に「シツカナリ(〇上濁○○〇)」とある。「寧」字については、『同』(法下二五ウ4)に「シツカニ」とある。

### シナフ(哀)

○哀<sup>シナ</sup>ヘル【左傍には「カナシフ」と加点】者ト云は慈【平】仁【平濁】ア(り)て『梅本』卷下・玄用第六十九・<sup>242</sup>③

『書本』には「哀ヘル」、『群本』には「哀<sup>シ</sup>フ」と加点する。

『集成』には、「シナフ」に「哀」字の例は見られない。観『名』にも見えない。

### シヒテ(彊) ↓ シヒニ(彊)

○彊<sup>シヒ</sup>て我か為に書【平】を着<sup>アラハ</sup>せ【左傍には「シルセ」とある】と云『梅本』卷上・序・4③

因みに、『書本』も「彊<sup>シヒ</sup>て」と加点する。

『集成』には、「彊」字に「シヒテ」次項の「シヒニ」訓の例は見られない。因みに、『集成』には、「彊」字の訓として「アマリ」「カギリ」「キハマリ」「クニ」「コハシ」「スクム」「ヲフ」等が見られる。観『名』にも見えない訓である。

### シヒニ(彊) ↓ シヒテ(彊)

○彊<sup>シヒ</sup>(に)【右傍に「アナカチ」、左傍に「シヒ」と加点されている。】詰り問フテ而て得可(から)(ず)「不也」『梅本』卷上・贊玄第十四・47④

『書本』には「彊<sup>シヒテ</sup>」とのみ加點されている。前項「シヒテ」との関連で考えれば、当然「シヒテ」とも考えられるが、『梅本』の右傍の加點「アナカチ」訓を考慮して「シヒニ」とした。観『名』にも見えない。

### シメス(見)

○素<sup>シメ</sup>を見シ【左傍には「アラハシ」とある。因みに合點あり。】撰<sup>グ</sup>を抱ク(『群本』卷上・還淳第十九・64③)『梅本』『書本』には「見<sup>アラハ</sup>シ」と加點されている。

『集成』には、天理図書館藏平安後期点『五臣注文選』、東洋文庫藏保延五年点『春秋経傳集解』等十例が示されている。観『名』(佛中四二〇一)に「シメス(上平上)」とある。

### シリツク(黜)

○世<sup>ヨ</sup>能ク、及(ぶ)こと莫キハ、則(ち)、點<sup>シリツ</sup>ク「之」(『梅本』卷上・序・5⑤)『書本』にも「點<sup>シリツ</sup>ク」とあり、更に左傍に「一退」の義注が見える。

『集成』には、石山寺藏長和五年点『菩薩戒経』、天理図書館藏平安後期点『五臣注文選』等七例が示されている。観『名』(佛下本三六〇八)に「シリツク(平平平濁平)」と見られる。

### シルシ(徴)

○生ル、トキニシテ老<sup>シルシ</sup>の徴有(り)(『梅本』卷上・序・1⑤)『書本』も同じに加點する。

『集成』には、二十例に近い用例が示されている。観『名』(佛上三二ウ8)に「シル<sup>スシ</sup>」(〇〇上)、「高『名』(二二〇一)にも「シルシ(上上上)」とある。



## スガタ(質)

○朴ニシテ且(つ)質ナリ〔也〕『梅本』卷下・顕質第八十一・271④

『書本』は無加點。『集成』には、石山寺藏長寛元年点『大唐西域記』他四例が示されている。観『名』には見えない。

## スクナシ(希・寡)

○言を<sup>コト</sup>希<sup>スクナ</sup>クル【左傍には「ヲシム」と加點】トキ<sup>ハ</sup>自然なり『梅本』卷上・虚無第廿三・77①

『書本』は「希クする」と加點。

『集成』には、「スクナシ」に「希」字は見えない。

観『名』(法中五六オ8)に「スクナシ(平平○○)」と見える。

○猶(ほ)寡<sup>スクナ</sup>ク乏<sup>トモシ</sup>シキか若<sup>コトク</sup>シ(て)『群本』卷下・獨立第八十・268①

『集成』には、「寡」字の「スクナシ」訓の例は三十数例見られる。観『名』には「スクナシ」に「寡」字は見えない。

## スコシ(細・寡)

○大ナルコトヲ其の細<sup>スコ</sup>シキナルニ〔於〕為す『梅本』卷下・恩始第六十三・217②

○大イナルことを其の細<sup>スコ</sup>シキ(なる)に〔於〕為す『書本』卷下・恩始第六十三・217②

『集成』には、東大國語研究室藏永久二年点『大毘盧遮那成佛經疏』、東寺金剛藏藏保安元年『大毘盧遮那經疏』の二例が見られる。

観『名』(法中六三オ5)に「スコシキ」と見える。因みに、凶『名』(二九八3)にも「スコシキ(平上平平)」と見える。

○猶(ほ)之を寡<sup>スコ</sup>シキ(な)るか若<sup>コトク</sup>シ(て)『書本』卷下・獨立第八十・268①

『梅本』は「寡<sup>クラ</sup>【上】ナルカ」と加点する。

『集成』は、興福寺藏康和二年点『高僧傳』、東寺金剛藏鎌倉初期点『三論祖師相傳』、東洋文庫藏至徳三年『法華經音訓』の三例が示されている。観『名』には見えない。

### ススム(鋭)

○其ノ鋭<sup>ス</sup>ムを挫クシテ『梅本』卷上・舞源第四・19①

『書本』も「鋭<sup>ス</sup>ムを」と加点する。割注部分に「鋭<sup>エイ</sup>は進【去】(なり)【也】」「『梅本』、「鋭<sup>エイ</sup>【去】は進【去】(なり)【也】」「『書本』とある。

『集成』には、「ススム」に「鋭」字は見られない。観『名』(僧上六四オ7)には「ススム(上上平)」とある。

### スツ(去・捐・舍)

○乱煩【平】を去<sup>ス</sup>ツ「也之」『梅本』卷上・安民第三・17②

当該箇所を『書本』には「去<sup>サ</sup>ク」と加点する。

○道人は情を捐<sup>ス</sup>テ『書本』卷上・帰根第十六・54③

因みに、『梅本』は「捐シ」と加点する。

○慈【平】を舍<sup>ス</sup>テ、且【上】タ勇<sup>イサ</sup>メリ『梅本』卷下・三寶六十七・235④

『書本』『群本』も同じに訓む。

『集成』には、「去」字に「スツ」と加点する例は、四十数例と多い。「捐」字に「スツ」と加点する例も二十数例と多く見られる。「舍」字については、六例が示されている。「去」字については、観『名』(佛上四五ウ3)に「スツ(上上)」、「捐」字については、『同』(佛下本三八オ8)に「スツ(上平)」とある。「舍」字は『同』(僧中二オ7)に「ス

ツ（上平）とある。

### スナホ（朴・樸）

○其レ、<sup>スナフ</sup>樸【左傍に「ハク」とも加点】ナルカ若シ『梅本』卷上・顕徳第十五・52②

○其（れ）<sup>スナフ</sup>朴ナルカ若シ『書本』卷上・顕徳第十五・52②

因みに、『梅本』の右傍に「朴」字の異本注記が見られる。

『集成』には、「朴」字の例として、宮内庁書陵部蔵保延四年加點『文鏡秘府論』醍醐寺蔵建保二年點『大唐西域記』の二例が示されている。「朴」字については、觀『名』（佛下本五一オ3）に「スナヲナリ（上上〇〇〇）」、「樸」字については、宮内庁書陵部蔵保延四年點『文鏡秘府論』の一例のみが見える。觀『名』（佛下本二九オ1）に「スナホニ」と見える。

### スエ（葉）

○此（れ）言は本【左傍に「モト」と加點】ハ、<sup>スエ</sup>葉（に）〔於〕勝ツ『梅本』卷下・去用第四十・144①

○此（れ）は言は本は<sup>スエ</sup>葉に〔於〕勝つ『書本』卷下・去用第四十・144①

『集成』には、東寺金剛藏藏応保二年加點『大日金輪蓮臺灌頂別傳儀軌』の例が一例見られる。觀『名』には見られない訓である。

### セム（闕）

○是レ乃チ人與、<sup>アラカ</sup>争ヒ<sup>セ</sup>闕<sup>サ</sup>メ<sup>サ</sup>不<sup>ル</sup>ル（の）〔之〕道德（なり）〔也〕『梅本』卷下・配天第六十八・238③

『書本』は、当該箇所を「争闕ハ不<sup>ル</sup>ル」と加點する。

『集成』には、「セム」に「闕」字は見えない。観『名』にも見えない。

### ソムク（負）

○皆陰を負ソムヒ而陽に向フ〔也〕（『梅本』巻下・任為七十三・25<sup>1</sup>②）

『群本』も「負イ而ソム」と加点するが、『書本』は「負フ而オテ」と加点する。

『集成』には、「負」字に「ソムク」と加点する例が、至徳三年本『法華經音訓』他十五例が示されている。観『名』（佛下本一〇オ3）にも「ソムク（平平〇）」とある。

### タガフ（爽・忒）

○五【上濁】味【上濁】は人のノ口を令テ爽ハ令ム（『梅本』巻上・檢欲第十二・40<sup>4</sup>）

『群本』も「爽ハ令（む）」と加点するが、『書本』は「爽ナラ令（む）」と訓む。なお、『群本』の欄外には「爽」字に右傍に「タカハ」、左傍に「ミタリナラ〔合点あり〕」の注記が見られる。割注部に「爽サツ【上】は妄□ツ【去濁】（なり）〔也〕」（『梅本』）、「爽【上】は妄（なり）〔也〕」（『書本』）、「爽は妄（なり）〔也〕」（『群本』）とある。

○常に徳アリて忒ハ（ず）（不）（『梅本』巻上・反朴第廿八・98<sup>4</sup>）

『書本』『群本』も「忒ハ不タカ」「忒ハ（ず）（不）」と加点する。

『集成』には、「忒」字の「タガフ」訓については、東山御文庫蔵延喜頃点『周易抄』、内藤乾吉蔵仁治二年点『古文孝経』を初めとする五例が示されてある。「爽」字については、上野淳一蔵天曆二年天『漢書楊雄傳』の例を初めてして十数例が示されている。因みに、『集成』中の「爽」字には「アキラカ・オホキ・ココダシ・ササシキ・サハヤカ・

タカシ・タガフ・タシカ・トガ・ヒラク」等の和訓が見られるが「ミダリ」訓は見られない。

観『名』（佛下末一九才五）に「爽」字に「タカフ（平平濁○）」とある。「忒」字については、『同』（法中四五ウ6）に「タカフ（平平濁○）」と見られる。

### タスク（佐）

○道を以（て）佐<sup>タス</sup>クル人【平濁】主は「者」『梅本』巻上・儉武第三十・105①

『書本』『群書』ともに「佐<sup>タス</sup>クル」と加点する。『集成』には、「佐」字に「タスク」訓を加点スル例は二十数例と多い。観『名』（佛上一七才2）にも「タスク」と見える。

### タダムキ（臂）

○臂<sup>タムキ</sup>【「タムキ」は左傍にあつて、右傍には「ヒチ」と加点】（を）攘<sup>カ</sup>ケ而仍ル「之」『梅本』巻下・論徳第三十八・133⑤

『書本』は、右傍に「タムキ」とのみ加点する。

『集成』には、『法華経音訓』の用例を含む六例が示されている。観『名』（佛中六四才1）に「タムキ（平上上○）」と見える。

### タツキ（淳）

○徳化の淳<sup>タツキ</sup>【平】ナリ「也」『梅本』巻下・為道第六十二・214①

『書本』には「淳<sup>アツ</sup>ケレハなり「也」とある。

『集成』には、「アツシ」は見えるが、「タツキ」は見られない。観『名』にも見えない。

### タツクル（糞）

○走【平】馬【上濁】を却<sup>シリツ</sup>ケテ以<sup>テ</sup>糞<sup>タツク</sup>ル『梅本』卷下・儉欲第四十六・161<sup>①</sup>

『書本』も「糞」字に「タツクル」と加点する。『群本』は右傍に「タツクル」、左傍に「コエス」とあり、「タツクル」には「平平平上」、「コエス」には「平平上」と差声する。

『集成』の「糞」字には「アクタ」「クソ」「コエ」訓が見られるが、「タツクル」は見られない。因みに、「タツクル」は「佃」「耕」「農」の三字にのみ見られる。観『名』には見られない訓である。

### タツヌ(原)

○聖人、少<sup>タツ</sup>を原ネ、大<sup>タツ</sup>を知<sup>ル</sup>『梅本』卷下・鑒遠第四十七・165<sup>①</sup>

『書本』『群本』も「原ネ」と加点する。

『集成』には、「原」字に「タツヌ」訓は十数例見える。観『名』(法下五六オ五)にも「タツヌ(平上濁○)」と見られる。

### タノミ(侍望)

○其<sup>ムカホ</sup>(の)報<sup>タミ</sup>を侍望ニ(せ)不<sup>レ</sup>也<sup>也</sup>『梅本』卷上・養身第二・14<sup>③</sup>

『群本』は「侍<sup>タミ</sup>望マ(ず)不<sup>レ</sup>也<sup>也</sup>」と加点する。因みに、『書本』は無加点。

『集成』には、興聖寺藏平安中期点『大唐西域記』の例を含む十数例が示されている。観『名』には見えない訓である。

### タヒラカナリ(夷)

○道に夷<sup>タヒ</sup>ラカナルは類【去】スルか若<sup>シ</sup>『梅本』卷下・同異第四十一・146<sup>①</sup>

『書本』も「夷<sup>タヒ</sup>ラカナルは」と加点する。

『集成』には、西大寺藏寛徳二年点『不空羅索神呪心経』を含む九例が見られる。観『名』(佛下末一八ウ八)に「タ

ヒラカナリ」とある。

### タフトシ(雄)

○其(の)雄<sup>タトキ</sup>【左傍には「サキ」と見える】を知(り)其の雌<sup>イヤシキ</sup>【左傍に「ノチ」とある】を守(る)ときは天

下<sup>タニタ</sup>谿<sup>タニタ</sup>為<sup>タニタ</sup>り『書本』卷上・反朴第廿八・96④)

当該箇所を『梅本』には、「雄」字の右傍に「サキ」、左傍に「ヲ」とある。因みに、『群本』は無加点である。

『集成』には、「雄」字に「カツ」「タケシ」「チ」「ヅ」「ヲトコ」「ヲドリ」「ヲヲシ」の和訓が見られるが、「タフトシ(タトシ)」は見られない。観『名』にも見られない。

### タフトブ(上)

○吉事には左を上<sup>タト</sup>フ【左傍には「カミス」とある】『梅本』卷上・偃武第卅一・111⑤)

『群本』は、右傍に「カミニす」、左傍に「タトフ」と加点する。『書本』は「カミス」と加点。

○凶事には右を上<sup>タト</sup>フ【「タトフ」は左傍訓で、右傍は「カミニす」と加点】『群本』卷上・偃武第卅一・112①)

『梅本』は「上<sup>ミ</sup>トす」、『書本』は「上<sup>ミ</sup>にす」と加点する。

『集成』には、東北大学蔵延久五年点『史記孝文本紀』の用例一例が示されている。

観『名』(佛上四〇ウ3)に、「上」字に「タフトシ」とあり、「シ」の右傍に「フ」とある。因みに、高『名』には、「タフトシ(上上上〇)」とあり、「シ」の右傍に「フ(平)」と見られる。

### タフル(蹙)

○将に蹙<sup>タツ</sup>レン【左傍には「クツカヘラン」と加点】ことを恐(ち)ヨ(と)す【将】『梅本』卷下・法文第

『書本』は、『梅本』と全く同一に加点するが、『群本』は「クツカヘラ（む）」と加点する。

『集成』には、「タフル」に「蹙」字は見えない。観『名』にも見えない。

### タマシヒ（神）

○之（を）求（むる）に神<sup>タマシヒ</sup>を以<sup>モ</sup>テす當<sup>ヘ</sup>シ（『梅本』巻上・賛玄第十四・47④）

因みに、『書本』は無加点。

『集成』には、「神」字に「タマシヒ」の例は多く見られる。観『名』（法下二オ3）にも「タマシヒ」とある。

### タメ（與）

○之<sup>コ</sup>レか與<sup>タメ</sup>ニ言<sup>イ</sup>フ。（『書本』巻上・序・4②）

『梅本』は、当該箇所を「之<sup>トモ</sup>レト與<sup>トモ</sup>ニ」と加点する。『集成』には、「與」字の「タメ」訓については六十数例の例が示されている。観『名』には「與」字に「タメ」訓は見られない。

### チカシ（幾）

○故に道に〔於〕幾<sup>チカ</sup>シ〔矣〕（『梅本』巻上・易性第八・28⑤）

当該例については、『書本』も「幾<sup>チカ</sup>シ」と加点する。

○水性、道<sup>ト</sup>與<sup>ト</sup>同（く）シテ幾<sup>チカ</sup>シ【左傍には「コト／＼ニス」と加点】（『書本』巻上・易性第八・28⑤）  
当該例については、『梅本』は「ホト／＼」と加点する。

『集成』には、前田育徳会蔵院政期点『日本書紀』（継体紀）、高山寺蔵鎌倉中期点『莊子』（卷第三）等四例が示されている。観『名』（僧下五四オ7）にも「チカシ（平平〇）」とある。



## チリハム（鏤）

○下則（ち）上に化して金【平】を飭り玉を鏤チリハメ（『梅本』巻下・涼風第五十七・197①）  
『書本』も「鏤チリハメ」と加点する。『集成』には、類例が十数例示されている。  
観『名』（僧上六六オ一）にも「チリハム（上○上濁平）」と見える。

## ツイツ（序）

○言は礼の為【去】に度を制【去】シ威儀を序ツイツソ（也）（『梅本』巻下・論徳第三十八・133③）  
『書本』も「序ツイツソ」と加点する。

『集成』に、東洋文庫蔵至徳三年『法華經音訓』を含む十例が示されている。観『名』に「ツイツ」訓は見えないが、  
観『名』（法下五三ウ4）に「ツイテ」と見える。因みに、観『名』（僧上二〇オ5）に「ツイツ上上平濁」と見える。

## ツカマル（據）

○猛【去】獸【去】ツカマ據（ら）（ず）（不）（『梅本』巻下・玄符第五十五・188③）  
○猛【去】獸【去】ツカマも據（ら）不ナ（『書本』巻下・玄符第五十五・188②）

『集成』には、「據」字に「アタル」「ウツ」「オイテ」「オサフ」「オス」「ツク」「ヨス」「ヨセテイフ」「ヨドコロトス」「ヨリテイフ」「ヨル」「ヨンドコロ」と多くの和訓が見られるが「ツカマル」は見られない。観『名』には見られない訓である。

## ツカル（羸）

○必（ず）、羸ツカレ弱（き）所有（り）（也）（『梅本』巻上・無為第廿九・103④）

『書本』は「羸弱【入濁】ナル所」と加点する。

『集成』には、聖語藏弘仁頃点『願経四分律』等三十数例が示されてある。

観『名』（僧中四八ウ2）にも「ツカル（平上平）」とある。

### ツク（屈）

○虚<sup>ムナ</sup>シクシ而<sup>テ</sup>屈<sup>ツ</sup>キ（ず）「不」（『梅本』卷上・虚用第五・22②）

『書本』は「屈【入】せ不<sup>ス</sup>」と加点する。

『集成』には、東寺金剛藏久安三年点『成就瑜伽観智十二天儀軌』の例が見られるが、下二段の用例である。当該例は上二段活用である。観『名』には、「屈」字に「ツク」訓は見られない。

### ツク（給）

○家<sup>ヘ</sup>給<sup>ツ</sup>キテ人足<sup>タ</sup>リ『梅本』卷下・鑒遠第四十七・165③

○家<sup>ツ</sup>給<sup>ツ</sup>キ、人足<sup>リ</sup>『書本』卷下・鑒遠第四十七・165③

○家<sup>ツ</sup>給<sup>ツ</sup>キ、人足<sup>タ</sup>（り）て『群本』卷下・鑒遠第四十七・165③

『集成』には、宮内庁書陵部蔵『六臣註文選』他八例が示されている。観『名』（法中六八ウ5）にも「ツク」と見える。

### ツク（之）

○人を器<sup>モノ</sup>に之<sup>ツ</sup>ケ而<sup>テ</sup>用<sup>フ</sup>半（ず）「不」（『梅本』卷下・獨立第八十・268③）

『書本』も「之<sup>ツ</sup>ケ而<sup>テ</sup>」と加点する。『書本』には「之」字に対して義注「―就也」が見られる。

『集成』には、「之」字に「イタル」「イフ」等十六の和訓が示されているが、「ツク」訓は見られない。観『名』にも、

「之」字にも「ツク」訓は見られない。

### ツツマヤカニ(約)

○約<sup>ツマ</sup>ヤカニシ而行ヒ易シ「之也」『梅本』巻下・知難第七十・<sup>243</sup>243(2)

『群本』も「約<sup>ツマ</sup>ヤカニシ而<sup>て</sup>」と加点する。『書本』は「約」字に「約<sup>ツ</sup>」のように第一音節のみの部分加点である。

『集成』には、興福寺藏承徳三年点『大慈恩寺三蔵法師傳』の例を含めて六例を示している。

観『名』(法中三ウ<sup>2</sup>)に「ツ、マヤカニ(平平濁平○○○)」、図『名』(三〇八<sup>7</sup>)に「ツ、マヤカニ(平平濁平上平上)」と見える。

### ツツリ(褐)

○是を以て聖人は<sup>ツハリ(金ホアリ)</sup>褐<sup>カフ</sup>【去】「左傍に「戸葛反」の字音注がある」を被<sup>キ</sup>、玉を懷<sup>イダク</sup>ク『書本』巻下・知難第

七十・<sup>244</sup>244(4)

『梅本』は「褐<sup>カフ</sup>【去】」と加点し、『群本』は「褐<sup>カフ</sup>【去】」とある。

『集成』の「褐」字には「キモノ・ヌノキヌ」の例のみである。

観『名』(法中七二ウ<sup>7</sup>)に「ツ、ル」と見える。

### ツトム(彊)

○彊<sup>ツト</sup>メ【左傍に「シ」の加点】て行<sup>ツコナ</sup>フ者は志<sup>サシ</sup>有<sup>リ</sup>『梅本』巻上・辨徳第卅三・<sup>118</sup>118(4)

○能<sup>ツト</sup>ク、力を彊<sup>ツト</sup>メ【左傍に「コハ」の加点】善を行(ふ)ときは、『梅本』巻上・辨徳第卅三・<sup>118</sup>118(5)

『梅本』に「彊」字の见られる当該箇所は、『書本』『群本』では「強」字であり、何れも「ツトメテ」と加点されるものである。

『集成』には、「彊」字には「アマリ」「カギリ」「キハマリ」「クニ」「コハシ」「スクム」「ヲフ」と見えるが、「ツトム」訓は見られない。観『名』にも「ツク」訓は見えない。

### ツネニ(或)

○或に<sup>ツネ</sup>盈<sup>ミ</sup>タ不<sup>ス</sup> 『書本』卷上・無源第四・18⑤

『梅本』の「或」字の箇所が破損して字の確認は不可能で有るが、右傍の「ツネニ」は確認可能である。なお、割注部には、「或【入】は常(なり)【也】」(『梅本』)、「或は常(なり)【也】」(『書本』)とある。

『集成』には、大槻文彦蔵天正六年寫『老子道德經』の例一例が示されている。観『名』(僧中二一オ5)に「ツネニ(平平上)」とある。

### ツヒヤス(弊)

○能(く)弊<sup>ツヒヤ</sup>シテ新タニ成<sup>サセ</sup>不<sup>ス</sup> 『梅本』卷上・帰根第十六・53④  
『書本』も「弊<sup>ツヒヤ</sup>シテ」と加点する。

『集成』には、「弊」字に天理図書館蔵平安後期点『五臣注文選』の「ツヒヤカス」の例が一例見られる。観『名』には見えない訓である。

### ツミス(坐)

○吾か身<sup>ヲ</sup>有<sup>ル</sup>(る)ことを坐<sup>ツミ</sup>ス 『梅本』卷上・厭恥第十三・44③  
『書本』も「坐<sup>ツミ</sup>ス」と加点する。

『集成』には、京都国立博物館蔵平安後期点『日本書紀』卷第二二、東北大学蔵延久五年点『史記』(孝文本紀)、東洋文庫蔵至徳三年刊『法華經音訓』の例が示されている。

観『名』（法中三五オ4）図『名』（二二九4）に「ツミ（平上）」とある。なお図『名』には「ツミス（平上上）」とある。観『名』にも「ツミス」とある。

### トク（釋）

○當に道<sup>マ</sup>の無為を念<sup>テ</sup>以て解<sup>ト</sup>キ釋<sup>ト</sup>ク當シ「之也」『梅本』卷上・無源第四・19③

○當に道（の）無為（を）念（て）以（て）解（き）釈<sup>ト</sup>ク當（し）「之也」『書本』卷上・無源第四・19③

『集成』には、西大寺藏平安初期点『金光明最勝王經』を含む一五例が示されてある。

観『名』（僧下四一ウ4）に「トク（平上）」と見える。

### トツ（闔）↓キル（闔）

『集成』には、「闔」字の「トツ」の加点点例として、前田育徳会藏長治二年頃点『冥報記』の例を含む三例が示されている。観『名』（法下三九オ8）に「トツ（平上濁）」とある。

### トトノホル（均）

○人之<sup>民イ</sup>を令【去】スルコト莫<sup>レ</sup>トモ而モ自<sup>ヲ</sup>（ら）に均<sup>トノホ</sup>ル【左傍には「ヒトシクナハム」と加點】「焉」『梅本』卷

上・聖徳第卅二・11③ 因みに、『書本』には「均<sup>ヒト</sup>シ」とある。

『集成』には、醍醐寺藏建保二年点『大唐西域記』の例が一例示されている。観『名』（法中二六ウ8）に「トノホル（平平平○○）」、図『名』（二二九6）に「トノホル（平平平上平）」と見える。

### トドマル（足）

○天下<sup>ノ</sup>の谷<sup>ヲ</sup>為<sup>ル</sup>ルトキ、常の徳アリて乃（ち）足<sup>トマ</sup>ル『梅本』卷上・反朴第廿八・100①

○天下（の）谷<sup>タ</sup>為るとき、常（の）徳あり（て）乃（ち）足<sup>ト、マ</sup>ル【左傍に「スウ（朱筆）」とある】『書本』卷上・反朴第廿八・100①

因みに、割注部に「足は止【上】ナリ【也】」（『梅本』）、「足は止（なり）【也】」（『書本』）。『集成』には、「足」字に二〇数語の和訓が示されているが、「トドマル」訓は見られない。観『名』には「足」字に「トドマル」訓は見えないが、「ト、ム」（法上三八〇一）が見られる。

### トル（搏・伐・持）

○搏<sup>ト</sup>レトモ「<sup>ナ</sup>之」、得（ざる）「不」<sup>ヲ</sup>を、名ツケて徴【平濁】と曰フ『梅本』卷上・賛玄第十四・46⑥  
『書本』も「搏<sup>ト</sup>レとも「<sup>ナ</sup>之」と加点する。

『集成』には、「搏」字に「トル」とする例が十三例示してある。

観『名』（佛下本三七オ6）に「トル（平上）」と見える。

○自<sup>ミ</sup>（ら）、伐<sup>ト</sup>ラ（ず）「不」。『梅本』卷上・益謙第廿二・75②

『書本』『群本』も「伐」字に「トル」と加点する。

割注部には「伐【入濁】ハ取（なり）【也】」（『梅本』）、「伐は取（なり）【也】」（『書本』）とある。因みに、『群本』の「伐」字の左傍には「取也」と義注の加点が見られる。

『集成』には、大槻文彦蔵天正六年本『老子道德経』の例、一例が示されている。

観『名』（佛上一〇オ5）に「トル（平上）」とある。

○手妄（り）に持<sup>ト</sup>ラ（ず）「不」『梅本』卷下・貴生第五十・171⑥

『書本』も「持<sup>ト</sup>ラ（ず）「不」と加点する。

『集成』には、「持」字に「トル」とする例が一九例示されている。観『名』（佛下本三七オ4）には、「トル（平上）」と見える。

### ナイガシロ（無）

○吾か身を無カシロニスルに及ヒ『梅本』卷上・厭恥第十三・44⑤

『書本』も「無カシロニスルに」と加点するが、左傍訓であつて、右傍の加点は「ナクスルに」とある。

『集成』には、「無」字に「ナイカシロニする」と加点する例として、内藤乾吉蔵仁治二年点『古文孝経』の一例のみが示されている。観『名』（佛下末二七オ4）に「ナイカシロ（平平平濁平平）」と見える。

### ナカバ（央）

○荒【平】「右傍に、「六（音）光」の字音注」トシテ「兮」其レ央ニモ未ル哉『梅本』66④

○荒とシ兮其（レ）央にもアラ（ざる）「未」哉『書本』卷上・異俗第廿・66④

『集成』には、宮内庁書陵部蔵保延四年点『文鏡秘府論』、東洋文庫蔵至徳三年『法華経音訓』の各例が見られる。観『名』（佛下末一八ウ8）に「ナカハ」とある。

### ナガル（行）

○決ルときは「之」則（ち）行ル「也」『梅本』卷下・任信第七十八・263②

『書本』も「ナカル」と訓む。

『集成』には、「行」字に五二例の和訓が示されているが、「ナガル」訓は見られない。観『名』（佛上二五オ1）に「ナカル（平平濁上）」、高『名』（二三ウ6）に「ナカル（平平濁上）」と見える。

## ナス（造）

○猶（ほ）牆を築イ（て）【左傍に「六（音）竹」とある】功を造ス【右傍の「ナス」に続けて「一成也」、左傍に「ハシムル述一始也」とある】『書本』巻下・法文第三十九・140⑤  
『梅本』は「造ムルは」と加点する。

『集成』には、高山寺藏永保二年点『大毘盧遮那成佛經疏』の例を含む五例が見られる。観『名』（佛上三二ウ二）に「ナス（平上）」と見える。因みに高『名』（三二ウ一）にも「ナス（平上）」（「ル」にも上声の加点がある）と見られる。

## ナツク（號・命）

○號<sup>ナツ</sup>ケて河上公と曰（ふ）「焉」『梅本』巻上・序・8③  
『書本』は左傍に「ナツケて」とあり、右傍は「號シ」と音読する。

『集成』には、「號」字の「ナツク」訓の例として三〇数例が示されてある。観『名』（佛中二〇オ一）に「ナツク（上上濁平）」と見える。

○夫レ、命<sup>ナツ</sup>【去<sup>ナツ</sup>】「ナツクル」は左傍にある】コト【之<sup>ナツ</sup>】莫クシテ【而<sup>ナツ</sup>】常に自然ナリ『梅本』巻下・養徳第五十一・174⑥

『書本』も、「命<sup>ナツ</sup>クル」は左傍にある】こと」と加点する。観『名』には見られない。

## ナル（就）

○成、功事就<sup>ナ</sup>テ退キ避<sup>ナ</sup>リて『梅本』巻上・養身第二・14③

『書本』は、「功成り、事就<sup>ナ</sup>りて」と加点する。『集成』には、『法華經音訓』の例を含む九例が示されてある。観『名』（佛



下末一・一オ2)に「ナル(平上)」とある。

## ニクム(疾)

○老子、時の王の大道を行(は)る(ざる)「不」ことを疾ムニク『梅本』巻下・益證第五十三・180①  
『書本』も「疾ム」と加点する。

『集成』には、京都国立博物館蔵天永四年点『文集』巻三の例を含む一〇数例が示されている。観『名』(法下五八オ4)に「ニクム(平平上)」とある。

## ニゴラス(渾)

○天下の為(に)其の心を渾ニゴラす『梅本』巻下・任徳第四十九・170①  
『書本』も「渾【上】す」と加点する。

『集成』には、「渾」字に「ニゴル」(三例)、「渾濁」に「ニゴラハシ」(一例)の例が見られる。観『名』(法上一七オ3)に「ニコル(平平濁上)」とある。図『名』(四六6)にも「ニコリ(平平濁平)」と見える。

## ニギハフ(賑)

○富(み)ては當に貧シキに賑ニギハフ當シ『梅本』巻上・運夷第九・31②

『書本』には、「賑」字の左傍に「ニキワウ」と加点し、右傍には「スクフ」と加点する。因みに、『群本』は「去」字に「スクフ」ある。『集成』には、「賑」字に「ニギハウ」訓は見えない。観『名』にも見えない。

## ネガフ(楽)

○道、亦、得ルコトヲ樂フ【左傍に「タノシフ」と加点し合点がある】「之」『梅本』79⑥  
『書本』も「樂」<sup>ネカ</sup>【去濁】フ」と加点する。

『集成』には、「樂」字に「ネガハシ」「ネガヒ」「ネガフ」、「樂欲」に「ネガハシ」、「願樂」に「ネガハクハ」等の訓が見られる。觀『名』（佛下本五四オ1）に「ネカフ」とある。

### ネヤス（埏・和）

○埏<sup>ハニツチ</sup>を埏<sup>ネヤ</sup>シ以て器<sup>モノ</sup>に為ル『梅本』卷上・無用第十一・38③

○土を和<sup>ネヤ</sup>シ【「ネヤシ」は左傍にあり、右傍には「ワカシ」と加点する】以て食欲の「之」器<sup>モノ</sup>に為ル【也】『梅本』

卷上・無用第十一・38④

『書本』では、前者は「埏<sup>ネヤ</sup>シ」と加点するが、後者は無加点である。

『集成』は、「埏」字に「ネヤス」と加点するものとして五例示されるが、「和」字に「ネヤス」訓は見られない。「埏」字については、觀『名』（佛下本三二オ4）に「ネヤス（平上平）」、「和」字についても、觀『名』（佛中二六オ6）に「ネヤス（平上平）」、高『名』（七三ウ5）に「ネヤス（平上平）」と見える。

### ノゾム（莅・加）

○道を以（て）天下に莅<sup>ノゾム</sup>ム【左傍に「臨也」の義注が見える】ときは【者】、『梅本』卷下・居位第六十・207②

○道を以（て）天下に莅<sup>ノゾム</sup>メは【別訓に「莅（む）トキンハ」がある】【者】『群本』卷下・居位第六十・207②

因みに、『書本』は義注を含めて『梅本』と同じく加点する。

○故に兵を抗<sup>ア</sup>ケ相（ひ）加<sup>ノゾム</sup>ム『梅本』卷下・玄用第六十九・242③

因みに、『書本』『群本』は、「加」字に「アタル」と加点する。

『集成』には、「苙」字の「ノゾム」訓は、大谷大学蔵長承三年点『三教指歸注集』の例を含む五例が見える。「加」字には一四例の和訓が示されているが、「ノゾム」訓は見られない。

「苙」字については、観『名』（僧上一五ウ）に「ノソム（上上濁○）」とある。「加」字に「ノゾム」の訓はない。

## ノチ（雌）

○其（の）雄<sup>サキ</sup>【左傍に「ヲ」とある】<sup>ヲ</sup>知<sup>シ</sup>り其（の）雌<sup>ノチ</sup>【左傍に「メ」とある】<sup>ヲ</sup>守（り）『梅本』巻上・反朴第廿八・

96④

『書本』には、「雌」字の右傍に「イヤシキ」、左傍に「ノチ」と加点する。『群本』は、「雌【平】」と声点のみの加点である。

『集成』には、「雌」字に「ノチ」訓は見えない。観『名』（僧中六八オ4）には「ノチ（平平）」とある。

## ノブ（肆）

○直ニシ而肆<sup>テ</sup>ヒ（ず）「不」『梅本』巻下・順化第五十八・202③

『書本』も「肆<sup>テ</sup>ヒ」と加点する。なお割注部に「肆は申【平】（なり）」「也」「（『梅本』）」「肆【去】は申（なり）」「也」「（『書本』）のように見られる。

『集成』には、『大智度論』平安初期点を含む一〇余例が示されている。観『名』（佛下本一八オ3）に「ノフ（平上濁）」とある。

## ノブ（賦）

○下を賦<sup>ヘ</sup>テ（「ノヘテ」訓は左傍にあって、右傍には「シキテ」とある）自ら以て奉ず（也）『書本』巻下・論徳

第三十八・133  
①

『梅本』は無加点である。

『集成』には、天理図書館蔵久寿二年点『三教指帰』の一例が見えるのみである。観『名』には見えない。

ノボル(襄)

○山を懷【右傍に「包也」の義注がある】(ね) 陵に襄ル 〔梅本〕卷下・任信第七十八・263③

○山を懷ネ陵に襄リ 〔書本〕卷下・任信第七十八・263③

『集成』には、東寺金剛藏平安後期点『大毘盧遮那經疏』を含む十数例が見られる。観『名』には見えない。

ハジム(造)

○功を造ムルは卑キ(に) 因(り)て高を成すか猶シ 〔梅本〕卷下・法文第三十九・140④

『書本』には、左傍に「ハシムル」、右傍に「ナス」とあり、義注として、左傍には「述―始也」、右傍には「―成也」と見られる。

『集成』には、保延二年『法華經單字』の例が示されている。観『名』(佛上三二ウ2)に「ハシム(上上濁○)」とある。

ハジメ(甫・子・母・根)

○以て衆に甫を開ケシム【左傍に「ウク」とあり、合点も見られる】 〔梅本〕卷上・虚心第廿一・71⑥

『書本』も「甫を開ケシム」と加点する。割注部に「甫【上】は始【上】(なり)」「也」「〔梅本〕」、「甫は始(なり)」「也」「〔書本〕」とある。

○道の「<sup>ハシメ</sup>之」子なり『書本』巻下・法文第三十九・136①

当該箇所を『梅本』は欠く。

○有名は萬物（の）「<sup>ハシメ</sup>之」母ナリ『梅本』巻上・體道第一・10②

『書本』は「母」字に訓読の点を加点するが、仮名点はない。

○是を天地（の）「<sup>ハシメ</sup>之」根【左傍に「モト」と加点】と謂（ふ）『梅本』巻上・成象第六・24⑥  
『書本』は右傍に「ハシメ」とのみ加点。

『集成』には、「甫」字に「ハジム」と加点する例は、法隆寺藏『大慈恩寺三藏法師傳』巻九の例を含む五例が示されている。「ハジメ」の加点例（二例）も見られる。「子」字には、二三例の和訓が示されているが、「ハジメ」訓は見えない。また、「母」字に「ハジメ」訓は見えない。「根」字については、保延二年『法華經單字』の「ハシメトス」の例のみが見られる。

「甫」字については、観『名』（佛上四三ウ6）「ハシム」とある。高『名』（四二オ7）にも「ハシム（上上濁平）」と見える。「根」字については、観『名』（佛下本四八オ3）に「ハシメ（上上濁上）」とある。

ハナクケ（**玄牝**）↓ハナクチ（**玄牝**）

ハナクチ（**玄牝**）

○是を玄牝<sup>ハナクチ</sup>【去】「ハナクチ」は左傍にあつて、右傍には「ヒ」と加点する。】と謂（ふ）『梅本』巻上・成象第六・23④

『書本』は、右傍に「ハナクチ」と加点する。

『集成』には、見えない訓である。観『名』（法下二三オ1）に「ハナクケ（上上〇〇）」とある。

## ハナツ(脱)

○魚をは洩に〔於〕脱ツ「ハナツ」は左傍にあつて、右傍には「ウシナフ」「タツ」と加点する〔べからず〕「不可」  
『梅本』巻上・微明第卅六・126⑤

『書本』には、右傍に「ハナツ」とのみ加点する。

『集成』には、前田育徳財団蔵『日本靈異記』巻下を含む五例が示されてある。観『名』(佛中六八ウ8)に「ハナツ」とある。

## ハナハダ(酷)

○国を治(む)ル者は刑罰、酷【入】「右傍に「コク」とも加点、左傍には「カラク」とも加点する。」深ナルと  
きは民、生を聊ンセ不『書本』巻下・制惑第七十四・252③

『群本』は「右傍に「コク」、左傍に「カラク」と加点するが、『梅本』は「酷深」は無加点である。

『集成』には、宮内庁書陵部蔵保延四年点『文鏡秘府論』お茶の水図書館蔵鎌倉中期点『文鏡秘府論』の二例が示されている。観『名』(僧下二九ウ8)にも「ハナハタ」とある。

## ハバカル(難)

○是を以て聖人は難ル猶シ「之」『梅本』巻下・恩始第六十三・218③  
『書本』は、左傍に「ハ、カル」、右傍に「カタン」、『群本』は「カタン」とのみ加点する。

○聖人の動作(し)挙事を(し)て〔於〕進退(し)て重ク難ルコト「之」、『梅本』巻下・恩始第六十三・218④  
『書本』は、左傍に「ハ、カル(ことは)」、右傍に「カタンスル(ことは)」と加点する。『群本』は「カタウスルコトハ」と加点する。

『集成』には、高野山大学図書館蔵承保元年点『蘇悉地羯羅經』の例を含む九例が示されている。観『名』（僧中六九ウ5）に「ハ、カル（上平濁上上）」と見える。

### ハマグリ（蚌）

ハマクリ

○明珠の蚌【「ハマクリ」は左傍にあつて、右傍には「ハウ」と加点する。】ハナの中に在り（『梅本』巻上・體道第一・

### 9④

○明【平】珠【平】の蚌ハマクリ中家【上・去】【「ハマクリ中家」は左傍にあつて、右傍には「ハウ」とある。】の中に在り

### 『書本』巻上・體道第一・9④

『集成』の「ハマグリ」の項に「蚌」字は見られない。観『名』（僧下一五オ7）には「蚌」字に「ハマクリ」とあるが、「蚌」字は見えない。

### ハラマル（妊）

ムスメ

○李氏か女に因（て）任ハラマ【去】【任】字には「ス」の加点があり、合点もある。】ルムスメ（『梅本』巻上・序・1

### ④

『書本』の「妊【去濁】」には「ハラマル」「す」の加点がある。因みに、『梅本』の「任」字は誤写であろう。

『集成』には、矢野長治郎蔵保延二年『法華經單字』、東寺金剛蔵承安四年点『最勝佛頂陀羅尼淨除業障經』、東洋文庫至徳三年刊『法華經音訓』の三例が示されている。観『名』（佛中一二ウ3）に「ハラム」と見える。高『名』（五九ウ2）には「ハラム（平平上）」とある。

### ヒク（掬・仍）

○建【去】徳は偷<sup>ヒ</sup>ク【左傍には「ヒカヘタル」と加点する】か若（し）（『梅本』巻下・同異第四十一・146⑥）

『書本』には「掄<sup>ヒ</sup>ク」とあり、「引也」の義注も見られる。猶、『梅本』の「偷」字は誤写であろう。

○仍<sup>ヒ</sup>クに敵無（し）（『梅本』巻下・玄用第六十九・241①）

『書本』は「仍」字に「ヒク」と加点する。「仍」字の左傍に「一引也」と義注が見られる。

○仍<sup>ヒ</sup>キ引ク「之」心を欲すと雖（とも）敵の仍<sup>ヒ</sup>ク（べき）「可」こと无（き）か若（し）「也」（『梅本』巻下・玄用第六十九・241①）因みに、右の例については、『書本』は無加点である。「仍」字とする。

『集成』には、「ヒク」の項に両字とも見られない。「掄」字については、観『名』（佛下本二八〇一）に「ヒク（上平）」とあるが、「仍」字に「ヒク」訓は見えない。

## ヒサグ（售）

○賣る者は疾<sup>ト</sup>ク售<sup>ヒサ</sup>カン【「ヒサカン」は左傍にあつて、右傍には「アキナハン」と加点する】ことを欲す「也」（『書本』巻下・為道第六十二・213③）

『梅本』は右傍に「ウラムコトヲ」、左傍に「アキナフ」と加点する。因みに、左傍に「ヒサク」も見られるので、「ヒサク（ことを）」と訓むか。『集成』には、「售」字に「アキナフ」「ウル」「シタガフ」の三訓が見られる。「ヒサグ」は見えない。観『名』にも見えない。

## ヒサシ（和）

○其の光を和<sup>ヒサ</sup>シウシテ（『梅本』巻上・舞源第四・19③）

『書本』は、当該例を「ヤハラケテ」と加点する。

『集成』には、「和」字に二二の和訓が示されているが、「ヒサシ」は見られない。観『名』にも見えない。



## ヒソカニ(陰)

○陰<sup>ヒソカ</sup>に精氣<sup>オコ</sup>を行ひて『梅本』巻上・象元第廿五・88④  
『書本』も「陰<sup>ヒソカ</sup>に」と加点する。

『集成』には、石山寺藏平安初期点『金剛般若集驗記』の例を初めとする一〇数例が示されてある。観『名』(法中二〇ウ2)にも「ヒソカニ(平平平上)」とある。

## ヒタタク(混) ↓アフ(混)

○故に混<sup>ヒタ、</sup>【去】ケ(て)而て一と為ル『梅本』巻上・賛玄第十四・47④  
因みに、『書本』には「混<sup>アフ</sup>て」と加点する。なお、割注部に「混<sup>コン</sup>【去】は合【入】(なり)【也】」(『梅本』、「混【去】は合(なり)【也】」(『書本』)とある。

『集成』には、真福寺藏承徳三年点『将門記』の例を含む四例が示されている。観『名』(法上二三オ2)にも「ヒタ、ケテ(平平平平〇)」とある。図『名』にも「ヒタ、ケテ(平平平〇平)」と見える。

## ヒトトナル(長)

○長<sup>ヒト、ナ</sup>(り)而<sup>てツカ</sup>宰<sup>ツ</sup>タ(ず)【不】『梅本』巻下・能為第十・36⑥

『書本』は「長し(て)【而】とあつて、「長」字は音読されるものである。

『集成』には、「長」字を「ヒトトナル」とする例が九例示されてある。観『名』(佛下本一八オ一)にも「ヒト、ナルリ(上〇上上平)」とある。

## ヒトリ(唯)

○夫<sup>ヒッ</sup>(れ)唯<sup>ヒトリ</sup>大<sup>オ</sup>(き)ナリ『梅本』巻下・三寶第六十七・233①

『書本』にも「唯<sup>ヒトリ</sup>」と加点される。さらに、『書本』の左傍には「独也」の義注がある。

『集成』には、東洋文庫蔵至徳三年刊『法華經音訓』の例を含む一〇数例が示されている。観『名』（佛中三二才5）に「ヒトリ（平上平）」とある。

### ヒビ（峻）

○而も峻<sup>ヒビ</sup>【平】作【入】「ヒ、ノオコル」は左傍にあり、右傍には「サイサク」の加点がある【すること精の「之」至レルなり（也）』（『書本』巻下・玄符第五十五・189<sup>②</sup>）

『梅本』には「腴作スルコト」と加点されている。

### ヒマ（間）

○无<sup>キニ</sup>【平濁】間【平】（に）（於）入ルコト有（る）コト無シ（『梅本』巻下・偏用第四十三・153<sup>④</sup>）

『書本』『群本』は無加点。

『集成』には、十数例が示されてある。観『名』（法下三九ウ7）に「間」字に「ヒマ（上上）」と見える。

### ヒメモス（終日）

○終日に號<sup>ヒメモス</sup>レ（上平平）トモ（而）嗟<sup>ユヅ</sup>カレ（ざる）「不」こと、『梅本』巻下・玄符第五十五・189<sup>④</sup>

『書本』は無加点。『集成』には、「ヒネモス」に「終日」の例は多く見えるが、「ヒメモス」には「竟日」「終朝」等の例は見えるが「終日」の例は無い。観『名』（佛中四四才8）に「ヒメモスニ（上去〇〇〇）」、高『名』（九三才4）に「ヒメモスニ（上上〇〇〇）」と見える。

### ヒラク（翕）

○將に翕<sup>ヒラク</sup>カント（右傍に「ヒラカント」（合点アリ）とあり、左傍には「スヘント」とある）欲シ「之」『梅本』巻

『書本』は、左傍に「ヒラカン」と加点する。

『集成』には、「翕」字に「ヒラク」と加点する例は見られない。観『名』（僧中五一オ1）に「ヒラク」とある。

## フカシ（沖）

○道沖<sup>フカ</sup>【平】ウシ而用ル<sup>て</sup>〔之〕『梅本』卷上・無源第四・18④

『書本』も「フカウシテ」と加点する。なお、割注部には「沖【平】は中【平】（なり）〔也〕」『梅本』、「沖は中（なり）〔也〕」『書本』とある。

『集成』には、真福寺藏弘仁頃撰『日本霊異記』の「沖深也」の例が示されている。観『名』（法上一五〇六）に「フカシ」、図『名』（一五一）にも「フカシ（平平平）」と見える。

## フトシ（矜）

○自<sup>ミ</sup>（ら）矜<sup>フト</sup>カラ【フトカラ】は左傍にあり、「右傍には「オホキカラ」と加点」不<sup>ス</sup>『梅本』卷上・益謙第廿二・75④ 因みに、『書本』『群本』には、「オホキニセズ」と加点する。

『集成』には、「矜」字に「フトシ」の加点例は見られない。観『名』（僧中一九ウ6）に「フトシ（平平〇）」とある。  
フフル（傷）↓ヤフル（傷）

## ヘリクダル（謙下）

○陰道は安静を以（て）謙<sup>ヘ</sup>【平<sup>リッ</sup>】下ルコトヲ為す〔也〕『梅本』卷下・謙徳第六十一・210②

『書本』は「謙下する」と音読する。

『集成』には、至徳三年刊『法華経音訓』所載の「謙」字の「ヘリクタル」の例のみが示されている。観『名』には「ヘリクダル」の掲出がない。

### ホヅ（蒂）

○是を根を深<sup>フ</sup>（くせ）シメ蒂<sup>ホツ</sup>を固<sup>カタ</sup>ンすと謂フ（『梅本』卷下・守道第五十九・205<sup>④</sup>）

『書本』は「蒂<sup>ホツ</sup>を固<sup>カタ</sup>ウス」と加点する。

『集成』には、仁和寺藏院政期点『医心方』の例一例が見られる。観『名』（僧上二四〇七）に「ホソ（上上）」とある。

### ホトホド（幾）

○水性<sup>イホトホト</sup>幾<sup>ヒト</sup>道與、同シ「也」（『梅本』卷上・易性第八・28<sup>⑤</sup>）

『書本』は、当該字は「幾」字に作り、その右傍に「チカシ」、左傍に「コトコトニス」と加点する。

『集成』の「幾」字には、単字としては「キ」とあるのみであり、「幾」字に「ホトホド」の訓が見られる。因みに、「ホトホド」訓は、一五例示されてある。観『名』（僧下五二〇一）に「ホトく（平平平平濁）」と見える。

### マウク（建）

○建言ニ【左傍に「マウケテ」「コトヲ」と加点する】有ツ<sup>タモ</sup>「之」（『梅本』卷下・同異第四十一・145<sup>③</sup>）

○言を建<sup>マウ</sup>ケ（て）有<sup>タ</sup>（つ）ことあり「之」（『書本』卷下・同異第四十一・145<sup>③</sup>）

因みに、割注部に「建【去】は設【入】（なり）「也」「梅本」、「建は設（なり）「也」「書本」とある。

『集成』には、「建」字に「マウク」訓は見えない。観『名』にも見えない。

### マガル(枉) ↓ マグ(枉)

○枉<sup>マカ</sup>ルときは則(ち)直シ『書本』卷上・益謙第廿二・73①

『群本』も「枉<sup>マカ</sup>ルトキハ」と加点する。

『集成』には、京都国立博物館蔵平安後期点『日本書紀』の例を含む七例が見られる。観『名』(佛下本四〇オ7)にも「マカル」とある。

### マグ(枉) ↓ マガル(枉)

○枉<sup>マ</sup>クルときは則(ち)直シ『梅本』『書本』卷上・益謙第廿二・73①

○己を枉<sup>マカ</sup>ケ屈<sup>カ</sup>メ而て人を申フルトキハ『梅本』卷上・益謙第廿二・73①

『集成』には、東大寺図書館蔵平安後期点『大般涅槃經』の例のみが示されている。観『名』(佛下本四〇オ7)にも「マク(上平濁)」とある。

### マサル(多・祥)

○身(と)貨<sup>タカラ</sup>與<sup>イツレ</sup>、孰<sup>マサ</sup>か多<sup>マサ</sup>レル『書本』卷下・立成第四十四・154④

因みに、『梅本』の「多」字の右傍の仮名点は不詳。「レル」の確認は出来る。

○生【平】を益<sup>マ</sup>ストキハ日に祥<sup>マサ</sup>ル『梅本』卷下・玄符第五十五・190④

『書本』にも「祥<sup>マサ</sup>ル」の加点がある。なお、割注部に「祥【平】は長(なり)【也】」「梅本』、「祥は長【上】(なり)【也】」「書本』とある。

『集成』には、「多」字の「マサル」訓については、保延二年『法華經單字』のみが示されてある。「祥」字に「マサル」

訓は見られない。

「多」字については、観『名』（法下六九オ6）に「マサル」とある。「祥」字についても、観『名』（法下六オ8）に「マサル」とある。

### マスマス（滋）

○法物【入濁】<sup>マスマスア</sup> 滋彰（れ）て盗賊、多ク有り（『梅本』卷下・涼風第五十七・197②）

『群本』も、「滋」字の右傍に「く」（繰り返し記号）とあるので「マスマス」と訓するものであろう。因みに、『書本』は「滋<sup>シケ</sup>ク」と加点する。

『集成』には、宮内庁書陵部蔵永治二年点『日本書紀卷第十五』の例一例が示されている。観『名』（法上九オ1）に「マスく（上上〇〇）」とある。

### マツフ（早服）

○是レを早服<sup>マツウ</sup>ト謂（ふ）（『梅本』卷下・守道第五十九・203④）

『書本』も「早服<sup>マツウ</sup>」と加点する。因みに、「早【上】は先【平】（なり）【也】」。服【入】は得【入】（なり）【也】」（『梅本』、「早は先（なり）【也】」。服は得（なり）【也】」（『書本』と義注する。

### マドフ（迷）

○智【去】アリと雖（も）大<sup>オホ</sup>キニ迷<sup>マト</sup>フ（『梅本』卷上・巧用第廿七・95⑤）

○此の人乃<sup>ス</sup>（ち）大（き）に迷<sup>マト</sup>ヒ惑<sup>マト</sup>ヒヌ【也】」（『梅本』卷上・巧用第廿七・96①）

前者の例については、『書本』『群本』ともに「迷<sup>マト</sup>フ」と加点する。後者については、『群本』は「迷惑す」と音読する。因みに、『書本』は無加点。

『集成』には、「迷」字の「マドフ」「マドハス」訓は多く見られる。観『名(佛上二六オ6)に「マトフ(平平濁上)」とある。

### マボル(抱・執・閉)

○一(を)抱リ【「マホリ」は左傍にあり、右傍は「イタイ」と加点する。】(て)能ク離ル、無キ乎【『梅本』卷上・能為第十・33①。『書本』も「抱リ」と加点する。なお、割注部に、『書本』(33②)が「抱(り)て」と加点するもので、『梅本』は「抱ヒテ」と加点する。

○大ナル象を執ルトキ(は)、天下往ク【『梅本』卷上・仁徳第卅五・122⑤】

『書本』も「執ル」と左傍に加点する。なお、割注部に「執【入】は守【上】(なり)【也】」【『梅本』、「執は守(なり)【也】」【『書本』と見られる。】

○時に於イテ當に豫メ其の門閉ル(べし)【當】【也】【『梅本』卷下・守微第六十四・221①】

『書本』『群本』は左傍に「マホル」とあり、右傍には「トツ」と加点する。因みに、『群本』は「閉」を「閉」とする。『集成』には、「抱」字に「マボル」と加点する例として、大槻文彦蔵天正六年点『老子道德經』の例のみが示されている。「閉」字には、「マボル」訓は見られないが、「マバル」(東寺金剛蔵『大毘盧遮那經疏』と関係あるか。「執」字の「マボル」訓については見られない。観『名』には、「執」字(佛下末一〇ウ2)に「マモル(平平平)」とある。「抱」「閉」字に「マボル(マモル)」訓は見えない。

### ミ(吾)

○吾、将に、鎮【去】スルに【之】、無名の【之】朴【入】を以(て)セントナリ【『梅本』卷上・為政第卅七・128②】

『書本』も「吾<sup>ミ</sup>」と加点する。割注部に「吾【平濁】は身【平】なり〔也〕」（『梅本』）、「吾は身（なり）〔也〕」（『書本』）と見える。

『集成』には、「吾」字には「アガ」「アレ」「ヤツカレ」「ヤツコ」「ワガ」「ワレ」等の訓が見えるが、「ミ」は見られない。観『名』にも見えない訓である。

### ミ(寶)

○敵<sup>アタ</sup>を輕<sup>カロカロ</sup>シク(する)ことは吾<sup>ミ</sup>か寶<sup>ホロボ</sup>を喪<sup>チカ</sup>スに幾<sup>シ</sup>シ（『梅本』卷下・玄用第六十九・242①）

『書本』も「寶<sup>ミ</sup>を喪<sup>ホロボ</sup>ス」とあるが、『群本』は「寶<sup>ミ</sup>を喪<sup>ウシナ</sup>フ」と加点する。

『集成』には「寶」字に「ミ」と加点する例は見られない。

### ミジカシ(下・卑)

○高<sup>ミシカ</sup>を見而下<sup>テミシカ</sup>シと為<sup>ス</sup>す〔也〕（『書本』卷上・養身第二・13④）

○高<sup>ミシカ</sup>きは必<sup>ズ</sup>（ず）下<sup>ミシカ</sup>きを以<sup>テ</sup>（て）基<sup>ミ</sup>と為<sup>ス</sup>す（『梅本』卷下・法文第三十九・140③）

『群本』も「下<sup>ミシカ</sup>キ」と『書本』も「下<sup>カ</sup>キ」と加点する。

○當<sup>ミシカ</sup>に下<sup>ミシカ</sup>きを以<sup>テ</sup>（て）本<sup>ミ</sup>【上】貴<sup>ミ</sup>を貴<sup>ミ</sup>ス當<sup>シ</sup>（『梅本』卷下・法文第三十九・140④）

『群本』も「下<sup>ミシカ</sup>キ」と加点するが、『書本』は「下<sup>ミシカ</sup>し」とする。

○卑<sup>ミシカ</sup>キに因<sup>リ</sup>（りて）高<sup>ミ</sup>を為<sup>ス</sup>すか猶<sup>シ</sup>し（『書本』卷下・法文第三十九・140⑤）

『梅本』は「卑<sup>ミシカ</sup>キ」の右傍の仮名点は詳らかではない。

『集成』には、「下」字・卑」字に「ミジカシ」と加点する例として、各々七例、九例が示されている。観『名』には、「下」字（佛上四〇ウ5）に「ミシカシ」、「卑」字（佛中五七オ2）に「ミシカシ（平平平濁〇）」と見える。



## ミダリ（爽）

○五味は人の口を（して）〔令〕爽ナラ令（む）『書本』巻上・檢欲第十二・40④

『梅本』は「爽ハ令ム」、『群本』は「爽ハ令（む）」と加点する。因みに、『群本』の欄外注記に「爽」字の右傍に「タカハ」、左傍に「ミタリナラ」とあり、「ミタリナラ」には合点の加点もある。

なお、割注部には「爽【上】は妄【去濁】（なり）〔也〕」（『梅本』）、「爽【上】は妄（なり）〔也〕」（『書本』）、「爽は妄（なり）〔也〕」（『群本』）とある。

『集成』には、「爽」字に「ミダリ」の訓は見られない。因みに『梅本』『群本』に加点される「タガフ」については、上野淳一蔵『漢書楊雄傳』天曆二年点の例を含め十数例が示されている。観『名』（佛下末一九オ5）に「ミタリ（平濁○）」と見える。

## ミダリカハシウス（蓬累）

○其の人を得不レときは、則（ち）、蓬累シ【左傍に「ミタリカハシウ」「カシラカ、へ」とある】而行ク『梅本』

巻上・序・2④

『書本』には、右傍に「カシラカ、テ」、左傍に「カシラカ、ヘミタリカハシウ」の加点がある。

『集成』には、見られない例である。観『名』にも見えない訓である。

## ミダル（擾・昏）

○国治（むる）ときは〔者〕、民、擾レ不。〔書本』巻下・立成第四十四・157①

『群本』も「擾レ（ず）〔不〕」と加点するが、『梅本』は「擾レ」と加点する。

○民、利器多（き）ときは、国家滋昏ル【左傍には「クラシ」と加点する】『書本』巻下・涼風第五十七・196②

『群本』も「<sup>マスマスミタ</sup>滋昏ル」と加點する。『梅本』には、「<sup>クラ</sup>昏シ」とある。

『集成』には、「擾」字に「ミダル」と加點される例が九例示されている。しかし、「昏」字には「ミダル」の加點例は見られない。

「擾」字については、觀『名』（佛下本三三ウ2）に「ミタル（平平濁上）」とある。

### ミチ（始・母・象・朴・行）

○無名は天地（の）<sup>ミチ</sup>「<sup>ミチ</sup>始」左傍に「ハジメ」と加點し、合点を付す」ナリ『梅本』9⑥

『書本』も右傍に「ミチ」、左傍に「ハシメ」と加點する。

○而（し）て母を食<sup>モテ</sup>ル（を）貴フ『梅本』卷上・異俗第廿・69④

『書本』も「母を」<sup>ミチ</sup>と加點する。なお、割注部に「母は道【去】（なり）【也】」（『梅本』）、「母【平濁】は道（なり）【也】」（『書本』）と義注する。

○以て天下の母<sup>ミチタ</sup>為ル（べ）<sup>ミチ</sup>「可」シ『梅本』卷上・象元第廿五・85②

因みに、『書本』は無加點。

○大ナル象<sup>ミチ</sup>を執<sup>マホ</sup>ルトキ（は）、天下、往<sup>ユ</sup>ク『梅本』卷上・仁徳第卅五・122⑤

『書本』も「ミチ」と加點する。なお、割注部に「象【去】は道【去】（なり）【也】」（『梅本』）、「象は道（なり）【也】」（『書本』）と義注する。

○無名の「<sup>ミチ</sup>」朴を以てセヨ『書本』卷上・為政第卅七・128②

『梅本』は「朴<sup>ヘク</sup>【入】」と加點する。なお、割注部には「朴【入】は道なり【也】」（『梅本』）、「朴は道（なり）【也】」（『書本』）と見える。

○千里(の)「之」行【平】左傍には「アリキ」と見える【は足の下より「於」始る(『書本』巻下・守微第六十四・221③)

『梅本』は右傍に「アルキ」、『群本』は右傍に「ユキ」、左傍に「アリキ」と加点し、合点を付す。

『集成』には、「始」字の例として、穂久邇文庫本『五行大義』の例が一例、「行」字の例として、保延二年本『法華經單字』の例のみが示されている。「朴」字、「象」字、「母」字に「ミチ」と加点する例は見られない。

観『名』には、「始」字(佛中一二ウ7)に「ミチ(上上)」、「母」字(佛中一二オ6)に「ミチ」、「行」字(佛上二四ウ8)に「ミチ(上上)」と見える。「象」「朴」字に「ミチ」訓は見えない。

### ミツ(陰)

○陰に託イテ腐チ(ず)「不」(『梅本』巻上・象元第廿五・85①)

「陰」字の左傍に「水也」と義注の加点が見られる。『書本』は無加点。

『集成』には、「陰」字に「ミツ」の加点例は見られない。観『名』にも見えない。

### ムカフ(抱)

○万物、陰【平】を負イ而陽【平】に抱フ【左傍に「ノソム」と加点する】(『梅本』巻下・道化第四十二・148⑥)

『書本』も「抱フ」と加点する。なお右傍に「一向也」と義注を加点する。

『集成』の「抱」字に、「ムカフ」と加点する例は見られない。観『名』にも見られない。

### ムクユ(和)

○大【去】ナル怨【上】を和イルときは(『梅本』巻下・任契第七十九・265⑤)

『書本』も「和<sup>ムナシ</sup>ユル」と加点する。

『集成』には、「和」字に「ムクユ」と加点する例は見えないが、「ムクフ」の例として、大槻文彦蔵天正六年点『老子道德経』の加点例が示されてある。観『名』には見られない。

### ムサボル（贅・齋）

○日に食【入<sup>ビ</sup>】を餘<sup>アマ</sup>シ贅<sup>ムサボ</sup>レル行アリ 『梅本』卷上・重徳第廿六・89②

『書本』も「贅<sup>ムサボ</sup>レル」と加点する。左傍には「專<sup>セ</sup>稅<sup>イ</sup>反」と字音注が見える。割注部には「贅<sup>セ</sup>【去<sup>タム</sup>】は貪<sup>タム</sup>（なり）【也】」

『梅本』、「贅<sup>セ</sup>は貪<sup>タム</sup>【平】（なり）【也】」『書本』とある。

○齋<sup>ムサボ</sup>ルに若<sup>シ</sup>クは莫<sup>ナ</sup>シ 『梅本』卷下・守道第五十九・203③

『書本』も「齋<sup>ムサボ</sup>ルに」と加点する。なお、割注部に「齋<sup>ムサボ</sup>は貪<sup>タム</sup>【平】（なり）【也】」「『梅本』、「齋<sup>ムサボ</sup>【入<sup>ビ</sup>】は貪<sup>タム</sup>（なり）【也】」『書本』と見える。

『集成』には、両字ともに見られない訓である。

「贅」字については、観『名』（佛下本九才4）に「ムサホル（上上〇〇）」とあるが、「齋」字には見えない訓である。

### ムナシ（沖）

大盈<sup>エ</sup>【平<sup>ムナ</sup>】は沖<sup>ムナ</sup>シキか若<sup>シ</sup>（し） 『梅本』卷下・洪徳第四十五・157⑤

『書本』『群本』も「沖<sup>ムナ</sup>シキか」と加点する。なお、『群本』（158①）の割注部にも「沖<sup>ムナ</sup>シキか如<sup>シ</sup>（し）ト云ハ【者】」と見えるが、『梅本』『書本』は無加点である。

『集成』には、「沖」字に「ムナシ」訓は見られない。観『名』（法上一五才6）には「ムナシ」と見える。

メ(兌)

○其の兌【左傍に「徒外反」と字音注記がある】を塞(いで)『書本』卷下・歸元第五十二・177④

『梅本』は無加點。但し、兩本とも割注部分に、「兌【去】ハ目【入】(なり)【也】」(『梅本』、「兌【去】ハ目(なり)【也】」(『書本』)とある。

○其の兌を塞イ(で)其(の)門を閉ツ『梅本』卷下・玄德第五十六・191⑥

『書本』も「兌を」と加點する。なお、『梅本』は「兌」字の左傍に「目也」と義注する。

『集成』には見られない和訓である。観『名』にも見られない。

メタマシヒ(魄)

○肝【平】(は)魂【平】を蔵メ、肺は魄を蔵(め)『書本』卷上・成象第六・23③

『梅本』は無加點である。

『集成』には、「魄」字に「タマシヒ」と見えるのみで、「メタマシヒ」は見えない。観『名』(僧下二五ウ1)には「メタマシヒ(去平平平)」とある。

モチキル(食・注・事)

○而て母を食キル(を)貴フ『梅本』卷上・異俗第廿・69④

『書本』も「食キル」と加點する。割注部に「食【入】は用【去】(なり)【也】」(『梅本』、「食は用(なり)【也】」(『書本』)と見える。

○百姓、皆、其の耳【上濁】目【入】を注キル『書本』卷下・任徳第四十九・170②

『梅本』は「注」字に「ル」の確認は可能であるが、他は破損していて解読が不可能である。

割注部に「注【去】は用【去】」（『梅本』）、「注【去】は用（なり）【也】」（『書本』）と義注する。

○天を事【入】キルときは（『梅本』巻下・守道第五十九・203<sup>②</sup>）

『書本』も「事キル」と加点する。割注部に「事【去】は用【去】（なり）【也】」（『梅本』）、「事は用（なり）【也】」（『書本』）と見える。

『集成』の「注」字には、大槻文彦蔵天正六年点『老子道德経』の「モチユル」の例のみが示されている。「食」「事」字に「モチキル」訓の例は見られない。観『名』には、「食」字（僧上五三ウ5）に「モチキル（平上〇〇）」、「注」字（法上一八ウ8）に「モチキル（平上上〇）」と見える。「事」字には「モチキル」訓は見えない。

## モト（反）

○反は【モト】は左傍に加点【者、道（の）【之】動【去】なり（『書本』巻下・去用第四十・143<sup>②</sup>）

『梅本』は「反者」と加点する。割注部には「反【上】は本【上】（なり）【也】」（『梅本』・『書本』）とある。『集成』には、「反」字に「モト」訓はみられない。観『名』にも見られない。

## モトム（望・責・于）

○其の報【去】を責メ望マ（ず）【不】【也之】（『梅本』巻上・虚用第五・21<sup>②</sup>）

『群本』も『梅本』と同じに加点する。『書本』は右傍に「モトメ」と加点し、左傍に「セメ」と加点する。

○其の報を責メ望メ（ず）【不】【也】（『梅本』巻下・任徳第四十九・170<sup>⑤</sup>）

『書本』は、「責」字には「モトメ」と加点するが、「望」字は無加点である。

○意に【於】于メ（ず）【不】（『梅本』巻下・貪損第七十五・258<sup>①</sup>）

『書本』『群本』ともに「モトメ」と加点する。

『集成』には、「干」字に「モトム」と加点する例として、天理図書館蔵長和五年頃点『南海寄帰内法傳』の例を含む七例が示されてある。但し、「望」「責」の「モトム」訓は見られない。観『名』には、「干」字（佛上四五才3）に「モトム（平平上）」と見える。「望」「責」字の「モトム」訓は見えない。

### モハラ（純）

○四者の純モハラに備モハラへて道德弘遠コエシ【上】ナルトキハ『梅本』卷上・帰根第十六・57⑤

『書本』も「純モハラ（に）」と加点する。

『集成』には、「純」字に「モハラ」と加点するものとして二十数例が示されている。観『名』（法中六五ウ4）にも「モハラ（平上〇）」、図『名』（二九三五）に「モハラ（上平平）」とある。

### ヤウヤク（幾）

○常に幾ヤウヤク【「ヤウヤク」は左傍にあり、于傍の仮名点は破損している】成ルナに於イテ『梅本』卷下・守微第

六十四・223①

○常に於ナして幾ヤウヤク【右傍に「ホトホト」とも加点】成ル『書本』卷下・守微第六十四・223①

因みに、『群本』は「ホトホト」とのみ加点。

『集成』には、「幾」字に「ヤウヤク」と加点する例として、内藤乾吉蔵仁治二年点『古文孝経』、神宮文庫本正和三年点『古文尚書』の二例が示されている。観『名』（僧下五二才2）に「ヤウヤクニ」と見える。

### ヤシナフ（谷・摂・畜・食）

○神谷フトキハ死ナヤシナ（ず）「不」『梅本』23②

『書本』には「浴フ」と加点し、左傍に「谷一本」と注記する。なお、割注部には「谷は養【上】（なり）【也】」『梅本』「浴は養【上】」【養】字の左傍に「谷」字を記す（なり）【也】「【書本】とある。

○蓋シ聞ク善ク生【平】を撰ヤシナフ者は『梅本』172⑥

『書本』も「撰フ」と加点する。割注部に「撰は養（なり）【也】」『梅本』『書本』と見える。

○能ヤシナ（く）、謙を執ト（り）人を畜ヤシナフ、則（ち）『梅本』210⑤

『書本』も「撰フときは則（ち）」と加点する。

○天、人を食ヤシナフに五氣を以（て）す。『梅本』23⑥

『書本』も全同の加点をする。

『集成』には、「畜」字に「ヤシナフ」と加点する例は、十数例見られる。「谷」字に「ヤシナフ」と訓する例については、東洋文庫蔵至徳三年刊『法華経音訓』の例が見えるのみである。「撰」字に「ヤシナフ」と加点する例は見られない。「食」字の「ヤシナフ」訓については、大谷大学蔵長承三年点『三教指帰注集』の一例のみが示されている。

観『名』（佛中三三オ3）に「谷」字に「ヤシナフ（上上〇〇）」、観『名』（佛中五七ウ1）に「畜」字に「ヤシナフ（上上上平去）」、観『名』（佛下本四〇オ8）に「撰」字に「ヤシナフ（平上〇〇）」とある。「食」字については、観『名』（僧上五三ウ5）に「ヤシナフ（上上〇〇）」とある。

## ヤスシ（載）

○或（る）時（は）載ヤスク或（る）時は墮アヤウシ『梅本』卷上・無為第廿九・103⑤

○或（る）ときは載ヤスシ、或（る）ときは墮アヤウシ『書本』卷上・無為第廿九・103⑤



割注部に「載は安<sup>サイ</sup>（なり）〔也〕」（『梅本』）、「載は安<sup>サイ</sup>（なり）〔也〕」（『書本』）と見える。

『集成』には、「載」字に「ヤスシ」訓は見られない。観『名』（僧中二一才二）に「ヤスシ（平平〇）」と見える。

### ヤフル（妨・傷）

○得難キ「之」貨<sup>タカラ</sup>は人のノ行【去】を令<sup>シ</sup>テ妨<sup>ヤラ</sup>レ令<sup>ム</sup>【シ】は左傍（『梅本』巻上・檢欲第十二・41③）

『書本』『群本』ともに「妨<sup>ヤラ</sup>レ」と加点する。

『集成』には、「妨」字に「ヤフル」訓と加点する例は見られない。

○生を養（ふ）「之」人は、虎兇も傷<sup>ヤブ</sup>ルに由無（く）、（『書本』巻下・貴生第五十・173③）

当該例は、『梅本』には、「傷<sup>ヤブ</sup>ルに由無（く）」とある。「フフ」ならば、二字目の「フ」は「フ」で書記するのが一般的と思われるので、一字目の「フ」は「ヤ」の誤写であらう。

「妨」字については、観『名』（佛中一三才三）に「ヤフル」、「傷」字については、観『名』（佛上一五ウ五）に「ヤフル（平平濁上）」と見える。

### ヤム（輟）

○子【上】孫【平】祭祀<sup>シ</sup>【上】ヲ以て輟<sup>ヤ</sup>マ（ず）「不」（『梅本』巻下・修観第五十四・183③）

○子孫、以て祭祀（し）て輟<sup>ヤ</sup>マ不<sup>ス</sup>（『書本』巻下・修観第五十四・183④）

『集成』には、「輟」字に「ヤム」と加点する例は、二十例弱と多く見られる。観『名』（僧中四八才八）にも「ヤム（上平）」と見える。

### ユク（適・之）

○孔子、周に適<sup>ユ</sup>イ（て）禮を老子に〔於〕問<sup>ト</sup>フ。『梅本』卷上・序・2②

『書本』も同じく加點する。『集成』には三十數例の例が示されている。

○何の故に動（き）て死地に之<sup>ユ</sup>ク〔也〕（『梅本』卷下・貴生第五十・172③）

『書本』も同じく「之<sup>ユ</sup>（く）」と加點する。『集成』には、「之」字の「ユク」訓の例は極めて多く示されている。

「適」字については、觀『名』（佛上二八ウ5）に「ユク（上平）」、高『名』（二七ウ2）に「ユク（○平）」と見える。「之」字については、觀『名』（佛上三三ウ7）、同（法下二二ウ4）に「ユク」「ユク（上平）」とある。高『名』（三二ウ4）にも「ユク」とある。

### ユタカナリ（饒・泰）

○自<sup>ミ</sup>（ら）饒<sup>ユタ</sup>カナリ〔之〕利を求メテ『梅本』卷上・韜光第七・26③

『書本』も「饒<sup>ユタ</sup>カナリ」と加點する。

○奢<sup>ユタ</sup>り（を）去<sup>ユタ</sup>（け）泰<sup>ユタカナリ</sup>【左傍に加點】（を）去<sup>ユタ</sup>ク『書本』卷上・無為第廿九・104①

『梅本』『群本』は無加點。

『集成』には、「泰」字に「ユタカ」の加點例は、大谷大学蔵長承三年点『三教指歸注集』の例を含む四例が見られる。「饒」字については、十數例の用例が見える。

觀『名』（法上一一ウ8）に「泰」字に「ユタカ」とある。「饒」字については、觀『名』（僧上五三ウ7）に「ユタカナリ（平上○○○○）」と見える。

### ユルス（聴）

○人に聴<sup>ユル</sup>シ從<sup>シタカ</sup>フ〔也〕（『梅本』卷上・易性第八・30①）

『老子道德經』古点の和訓語彙攷略

『書本』も「聴<sup>ユル</sup>シ」と加点する。

『集成』には、「聴」字に「ユルス」とする例が六十数例見られる。観『名』（佛中三才1）にも「ユルス」と見える。

### ヨコシマ（徑）

○民、徑<sup>ヨコシマ</sup>を好む 『梅本』卷下・益證第五十三・180 ⑥

『書本』は「徑」字を「徑」字に作り「ヨコシマ」、『群本』は「侄」字に「ヨコシマ」と加点する。

『集成』には、「徑」「侄」字の孰れにも「ヨコシマ」訓は見られない。

### ヨシ（餌）

○樂<sup>タシシヒ</sup> 【入】餌<sup>ヨ</sup>キ（ときには）【左傍には「ヨキトキニハ」と加点】與<sup>トモ</sup>ニ、過客止ル 『梅本』卷上・仁徳第卅五・

123 ④

『書本』は「餌<sup>シ</sup>【去濁】」と加点する。割注部に「餌【上濁】は美<sup>ウツク</sup>（なり）【也】」『梅本』、「餌<sup>シ</sup>【去濁】は美（なり）【也】」

『書本』と見える。

『集成』には、「餌」字に「ヨシ」の加点例は見られない。観『名』にも見られない。

### ヨシ（歸・背）

○當に身を質 【入】撲<sup>ヒキ</sup>に【於】歸<sup>ヨ</sup>シ 『梅本』卷上・反朴第廿八・100 ②

『書本』は「皈」字に作り無加点。

『集成』には、「ヨシ」訓は見られないが、「ヨス」訓の例として、西大寺藏平安初期点『金光明最勝王經』、内藤乾吉藏仁治二年点『古文孝經』の二例が見られる。

○背【上】キか若キハ久シ〔矣〕〔梅本〕卷下・三寶第六十七・233④

『書本』は「肖」字。割注の部分に「背【上】は善【去】（なり）〔也〕」とある。『集成』には見られない。観『名』

### ヨノヒト（夫唯）

○夫唯【左傍には「ヨヒト江説」とある】、知（る）こと無シ〔梅本〕卷下・知難第七十・243⑤

『書本』には「夫唯は」、「群本」には、右傍には「ヨヒト」、左傍には「ヨノヒト」ある。なお、割注部には「夫【平】唯【上】は世【去】人ナリ〔也〕」〔梅本〕、「夫唯は世人なり〔也〕」〔書本〕、「夫唯は世人（なり）〔也〕」〔群本〕のように見える。

『集成』には、見られない加點例である。観『名』にも見えない。

### ヨブ（唱）

○言は前識（の）〔之〕人は愚闇ノ〔之〕唱【去】「ヨブ」は左傍にあつて、右傍には「シヤウ」と加點する【の始ナリ〔也〕〔群本〕卷下・論德第三十八・134⑥】

『集成』には、「唱」字に「ヨブ」の加點例は見られない。観『名』（佛中二三ウ1）に「唱」字に「ヨハフ」と見える。

### ヨミス（誉）

○其の次は親【平】シフ〔之〕誉すス〔之〕〔梅本〕卷上・淳風第十七・58⑤

『群本』は「ホム」と訓む。

『集成』には、「誉」字に「ヨミス」の加點例は見えない。観『名』にも見えない。

### ヨル（歸・倚）

○此は言は物類【去】、相歸ル〔梅本〕卷上・虚無第廿三・80⑤

『書本』も「相歸ル」と加点する。

○禍<sup>ワサヘヒ</sup>は「兮」福<sup>サイヘヒ</sup>【入】の「之」倚<sup>ヨリ</sup>ル所ナリ（『書本』巻下・順化第五十八・200<sup>①</sup>）

『群本』も「倚<sup>ヨリ</sup>ル」と加点する。『梅本』は無加点。

因みに、割注部に「倚【平】ハ因【平】（なり）【也】」（『梅本』）、「倚<sup>イ</sup>【上】は因（なり）【也】」（『書本』）、「倚<sup>イ</sup>【上】は因【平】」（『群書』）と見える。

『集成』には、「倚」字に「ヨル」と加点するものは九例、「帰」字に「ヨル」と加点するものは十数例と多く見られる。観『名』（佛上五才3）に「倚」字に「ヨル（上〇）」、観『名』（僧下四三ウ3）に「帰」字に「ヨル（上上）」と見える。

## ワカシ（少）

○其の老タルを見 其の少<sup>ワカキ</sup>を見（ず）「不」（『梅本』巻上・序・1<sup>⑥</sup>）

○其（の）老タルを見 其（の）少<sup>ワカキ</sup>ことを見（ず）「不」（『書本』巻上・序・1<sup>⑥</sup>）

『集成』には、七十数例に近い例が示されてある。観『名』（僧下三九才3）には「ワカシ（平平上）」と見える。

## ワカツ（割・幸）

○是を以て聖人、方【平】ニシ而割<sup>テワカ</sup>タ【左傍には「カツセ」と加点する】（ず）「不」（『梅本』201<sup>⑥</sup>）

『書本』は「割せ（ず）」「不」と加点する。

○長<sup>ナガ</sup>（り）而幸<sup>テワカ</sup>タ（ず）「不」（『梅本』巻上・能為第十・36<sup>⑥</sup>）

『書本』も「幸<sup>ワカ</sup>タ不<sup>ス</sup>」と加点する。

『集成』には、東大国語研究室蔵永久二年点『大毘盧遮那成佛經疏』の例一例が示されている。観『名』には見えない。

「宰」字の「ワカツ」訓は、『集成』観『名』ともに見えない。

## ワキマフ（別）

○大道の「<sup>コト</sup>之」人は自（<sup>ミ</sup>ら）別（<sup>ワキマ</sup>）へ殊ナラ（ず）「不」。『梅本』舞下・同異第四十一・146②

『書本』は「別に殊ナラ不<sup>ナ</sup>」と加点する。『集成』には、「別」字の「ワキマフ」訓は、二十例近く示されている。

観『名』（僧上四七ウ）に「ワキマフ（平平上平）」と見える。

## ワク（加）

○尊【平】行【去】は以て人に加ク【左傍には「コト、ス」とある。合点も付される】（べし）「可」『梅本』213③『書本』も「ワク」と加点する。なお、割注部に「加は別ル（なり）」〔也〕『梅本』、加は別【入】（なり）〔也〕『書本』とある。

『集成』には、「加」字に「ワク」と加点する例は見られない。観『名』にも見られない。

## ワザ（事）

○無事を事【ワザ】は左傍にあるもので、右傍には「コト」とある【トシ（『梅本』巻下・恩始第六十三・216①）

『書本』『群本』は「コト」と加点する。「ワザ」訓には「平上濁」と声点が差されている。

『集成』には、「事」字に「ワザ」と加点する例は十例見られる。観『名』（佛上四三ウ）に「ワサ（上平濁）」と見える。

## ワザハヒ（映・妖）

○弘遠【上】ナルトキハ 映【左傍には「ヤウモ」とある】モ無（く）（『梅本』巻下・帰根第十六・57⑥）

『書本』にも「ワサハイ」とある。

○善ケレとも復【去】（た）妖<sup>ワサハヒ</sup>【「ワサハヒ」は左傍にあつて、右傍には「エウ」と加點する】【去】を為す（『書本』卷下・順陀第五十八・201④）因みに『梅本』は「妖<sup>エツ</sup>」と加點する。

『集成』には、「妖」字の「ワザハヒ」の訓として、『日本靈異記』中卷、西大寺藏平安初期点『金光明最勝王經』の例等四例が示されてある。「殃」字の例として、石山寺藏平安初期点『金剛般若經集驗記』の「ワサハヒセリ」が示されている。観『名』（法下六八オ5）に「殃」字に「ワサハヒ（上上濁上上）」とある。「妖」字には見えない訓である。

## ワスル（外）

○其の身を外<sup>ワス</sup>レ【別訓として「外（に）シ」がある】（『書本』卷上・韜光第七・27①）  
因みに、『梅本』は「外にシテ」と加點する。

『集成』には、高山寺藏鎌倉中期点『莊子』の卷二十七・二十八の例、東洋文庫藏至徳三年『法華經音訓』の三例が見られる。

## ワツラハス（累）

○余<sup>ワレ</sup>、上<sup>カミ</sup>、天にモ累<sup>ワツラ</sup>ハ（ず）「不」<sup>モ</sup>。下、地にモ累<sup>ワツラ</sup>ハサ（ず）「不」。（『梅本』卷上・序・7⑤）  
○余<sup>ワレ</sup>、上<sup>ミ</sup>、天に累<sup>ワツラ</sup>【去】ハ（ず）「不」、（『書本』卷上・序・7⑤）

『集成』には、「累」字の「ワツラハシ」訓として、東北大学藏延久五年点『孝文本紀』を含む八例が見られる。因みに、「累」字に関して、下二段活用の「ワツラハス」の例が一例、「ワツラヒ」の例が十例、「ワツラヒス」の例が一例、「ワツラフ」の例が八例見られる。観『名』（法中六〇ウ6）に「ワツラフ（上上濁上〇）」とある。

## ヲカ（陵）

○山を懷<sup>カ</sup>ネ陵<sup>ノホ</sup>に襄<sup>リ</sup> 『書本』卷下・任信第七十八・263<sup>③</sup>。『梅本』は無加點。

『集成』には、上野淳一蔵天曆二年点『漢書楊雄傳』を含む十数例が見られる。観『名』(法中二オ4)に「ヲカ(上上)」と見える。

### ヲカス(干)

○鬼敢(へ)て人を于<sup>ヲ</sup>サ(ず)「不」「也」 『梅本』卷下・居位第六十・208<sup>③</sup>

○鬼、敢(へ)て人を于<sup>オ</sup>サ不<sup>サ</sup>「也」 『書本』卷下・居位第六十・208<sup>③</sup>

『群本』は「于<sup>ヲ</sup>サ(ず)」「不」「也」と『梅本』と同じく加點する。

『集成』には、「干」字に「ヲカス」と加點する例は多く、三十数例が示されている。観『名』(佛上四五オ3)に「ヲカス(上上平)」とある。

### ヲサム(揣・取)

○揣<sup>ヲ</sup>メ而<sup>て</sup>銳<sup>ト</sup>クスルは「之」長ク保<sup>タ</sup>ツ(べからず)「不可」 『梅本』卷上・運夷第九・30<sup>⑤</sup>

『書本』も「揣<sup>オ</sup>メ」と加點する。割注部に「揣<sup>ス</sup>は治【平】(なり)」「也」 『梅本』、「揣【上】は治【平】(なり)」「也」

『書本』と義注する。

○天下を取<sup>ヲ</sup>ムルには常<sup>ツネ</sup>に無【平濁】事【上】を以(て)す 『梅本』卷下・忘知第四十八・167<sup>②</sup>

『書本』は「取<sup>オ</sup>(むる)ときは、『群本』は「取<sup>ヲ</sup>ムルに」と加點する。

○天下を取<sup>ヲ</sup>ムルに足<sup>ヲ</sup>ラ(ず)「不」 『梅本』卷下・忘知第四十八・167<sup>④</sup>

因みに、『書本』は「オサムルに」 『群本』は「ヲサムルに」と加點する。

『集成』には、「揣」字に「カギル・ハカリミル・ハカル・マロカス」と見えるが、「ヲサム」は見えない。「取」字



にも「ヲサム」訓は見られない。観『名』（佛下本三〇オ8）には、「搯」字に「ヲサム（平平上）」とある。「取」字の「ヲサム」訓は見られない。

### ヲサム（除・為・政）

○朝は甚（だ）除マレリ『書本』卷下・益證第五十三・181②。『群本』も「除マレリ」と加点する。

『集成』には、「除」字の和訓として二十一の訓が見られるが、「ヲサム」訓は見られない。

○天下ヲ為ムルトキハ〔者〕『梅本』卷上・厭恥第十三・45④

『書本』の加点も全同である。

『集成』には、「オサム」訓の「為」字の例は、内藤乾吉蔵仁治二年点『古文孝経』、高山寺蔵鎌倉中期点『莊子』等四例が示されてある。

○政メ為る所無し〔也〕『書本』卷下・論徳第三十八・131⑤

「政」字の右傍に「収」の注記がある。義注であろう。因みに、『梅本』『群本』は「政メ」と加点する。

『集成』には、「政」字に「ヲサム」訓は見られない。観『名』（佛下末一六オ8）には「為」字に「ヲサム（平平〇）」、『同』（法中二三ウ3）に「除」字に「ヲサム（平平上）」と見える。「政」字に「ヲサム」訓は見えない。

### ヲシム（希）

○言を希ムハ〔ヲシムハ〕は左傍にあつて、右傍には「ス徑クナクスルトキハ」と加点する【自然なり（『梅本』

卷上・虚無第廿三・77①）

『書本』も右傍に「スクナクスルは」、左傍に「オシム」と加点する。

『集成』には、「希」字に「ヲシム」と加点する例は見られない。観『名』（法中五六オ8）には「ヲシム」とある。

以上『老子道德経』古点の和訓語彙の若干について、『訓点語彙集成』（築島裕編）・観智院本『類聚名義抄』を主とした「類聚名義抄」とに掲出されるか否かについて検討を加えた。

Ⅰ、『訓点語彙集成』・観智院本『類聚名義抄』ともに見えない和訓

アガフ（興）・アギト（吮・啞）・アサシ（渝）・アタフ（貸）・アタル（加）・アナガチニ（彊）・アフ（混）・アヤフシ（墮・イヘ（屋）・イマ（此）・イヤシ（雌）・ウク（閱）・ウシナフ（脱・無）・ウラム（售）・オコス（彊）・オタマシヒ（魂）・オモムク（微）・オモミル（者以）・カガマル（死）・カナシキカナ（也哉）・キハマル（勝）・クチ（門）・クツガヘル（蹙）・クラ（輿）・ケタル（辱）・ケツル（剗）・ケフ（此）・コトコトニ（幾）・コハシ（羸・彊）・コヤス（糞・サキ（雄）・シナフ（哀・シヒテ（彊）・シヒニ（彊）・スクナシ（寡）・セム（鬪）・タツキ（淳）・タツクル（糞）・タフル（蹙）・ツカマル（據）・ツク（屈・之・ットム（彊）・ニギハフ（賑）・ノゾム（加）・ハジメ（子・母）・ハマグリ（蟬）・ヒク（仍）・ヒサグ（售）・ヒサシ（和）・ヒヒ（一）・ヘリクダル（謙下）・マウク（建）・マツフ（早服）・マボル（閉）・ミ（吾）・ミ（寶）・ミダリカハシウス（逢累）・ミダル（昏）・ミチ（象・朴）・ムカフ（抱）・ムサボル（齎・メ（兌）・モチキル（事）・モト（反）・モトム（望・責・ヤブル（妨）・ヨコシマ（徑）・ヨシ（餌）・ヨシ（歸・背）・ヨノヒト（夫唯）・ヨミス（誉）・ワカツ（宰）・ワク（加）・ヲサム（取・政）

Ⅱ、『訓点語彙集成』には見えないが、観智院本『類聚名義抄』には見える和訓

アザムク（驕）・アラズ（不）・アザナフ（唱）・イタル（若）・イツハリ（奇）・イマ（今日）・ウガツ（貫）・オホキナ

リ(矜)・オボメク(訥)・カタチ(物)・カタナス(結)・カヘル(渝)・サムシ(吹)・サル(行)・シク(賦)・シツ  
カナリ(寧)・スクナシ(希)・ススム(銳)・ツヅリ(褐)・トドマル(足)・ナガル(行)・ネヤス(和)・ノチ(雌)・  
ハナクチ(玄牝)・ヒク(掄)・フトシ(矜)・マサル(祥)・マボル(執)・ミダリ(爽)・ミチ(母)・ムサボル(贅)・  
ムナシ(冲)・メタマシヒ(魄)・モチキル(食)・ヤシナフ(撰)・ヤスシ(載)・ヨブ(唱)・ヲサム(揣)・除(ヲシ  
ム(希)

III、『観智院本『類聚名義抄』には見えないが、『訓点語彙集成』には見える和訓

アシシ(凶)・アマシ(味)・アル(蕪)・イヤシ(細)・微(ウ)・足(ウ)・ウベナフ(諾)・オコル(作)・オトス(滅)・オ  
ビヤカス(劫)・オヨブ(逮)・カタチ(容)・キル(闔)・コトゴトク(彈)・コノム(喜)・コハシ(彊)・サク(去)・  
サグル(採)・シタガフ(脩)・スコシ(寡)・スエ(葉)・タノミ(特望)・タメ(與)・ツヒヤス(弊)・ナヅク(命)・  
ノブ(賦)・ノボル(襄)・マボル(抱)・ムクユ(和)・ヨシ(歸)・ワカツ(割)・ワザハヒ(妖)・ワスル(外)

IV、『訓点語彙集成』・観智院本『類聚名義抄』共に見える和訓

約一四〇語(略)

因みに、『訓点語彙集成』において、大矢透『仮名遣及仮名字體沿革史料』(第五十面)を底本とした『老子道德経』  
の用例は、イキドホル(紛)(前記分類Ⅲ)・ウ(足)(同Ⅲ)・カシラカカフ(逢累)(同Ⅳ)・カハル(渝)(同Ⅲ)・  
ツネニ(或)(同Ⅳ)・トル(伐)(同Ⅳ)・マボル(抱)(同Ⅲ)・ムクユ(但しムクフ)(和)(同Ⅲ)・モチキル(注)(同

Ⅳ)の如くである。

ところで、「訓點語彙集成」の凡例によると、『訓點語彙集成』は、「平安時代の訓點資料の中で、原則として西暦一〇〇一年以降のものについて、その和訓を集成したものである。西暦一〇〇〇年以前については、先年来の約束として、小林芳規氏が編纂される豫定であるが、(中略)一〇〇〇年以前についても、既に築島が集録してゐた分については、(中略)敢へて削除することをしなかった。」さらに、「下限については、一往、一二〇〇年までを中心としたが、例外として、鎌倉時代以降の訓點資料も若干集録した。(中略)それらは、一四〇〇年を下限とした。」由である。従つて、一〇〇〇年以前の訓點資料所載語の集成が小林芳規氏によつてなされることによつて、先のⅠⅡⅢに分類した訓點語彙に変動の可能性あると思われるが、『老子道德經』古点の和訓語彙がかなり特異なものであることは認め得ると思われる。特にⅠに分類した語の詳細については別に考えたい。

(本学教授)